

# 松本市内田清心・砂原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987. 3

長野県松本地方事務所  
松本市教育委員会

# 松本市内田清心・砂原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987.3

長野県松本地方事務所  
松本市教育委員会

# 序

この遺跡調査は、県営ほ場整備事業両内田地区の土地基盤整備工事を施工するに先立ち、埋蔵文化財の資料を記録保存するため、昭和61年6月から昭和61年9月に至り、清心・砂原遺跡約4,000m<sup>2</sup>を調査することとなったものであります。

調査の実施は、松本市教育委員会に委託し、調査を実施しました。

この間、ほ場整備工事の進捗に合せ、松本市教育委員会、土地改良区の皆様に多大な御協力を得て、事業の実施にも支障なく調査が行なわれました事につき敬意を表します。

調査の結果、清心・砂原遺跡には、縄文時代前期の住居址、土こう、土器等多数発掘され、地域の歴史を探る貴重な資料の記録保存が出来得ました事は、一重に関係各位の御協力と御理解によるものと心より感謝申し上げます。

昭和62年3月

松本地方事務所長 佐藤 善處

# 序

清心・砂原遺跡は松本市の東南部、内田地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所でもあります。

しかしながら、近年この地区に進められている県営ほ場整備事業が、当遺跡一帯に及んだため、松本市教育委員会では、長野県松本地方事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により7月21日から9月13日にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりですが、縄文時代前期の住居址、中世の墓址などや、それらに伴う土器、石器が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。

今回の発掘は、記録保存とよばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が充分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました両内田土地改良区、炎天下、発掘に従事された地元の皆様に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和62年3月

松本市教育委員会  
教 育 長 中島 俊彦

## 例　　言

1. 本書は昭和61年7月21日から9月13日の間実施された松本市内田に所在する砂原遺跡、清心遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
3. 本書の執筆は第1章事務局、第2章第1節太田守夫、第2節三村竜一、第3章第3節1島田哲男、2松本建連、その他の項目については直井雅尚が担当した。
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元　　滝沢智恵子

土器拓影　　滝沢智恵子

遺物実測　土器　島田哲男、三村竜一、向山かほる、伊丹早苗

石器　松本建連、田中正治郎

遺物写真　　閑沢　聰

編　集　　神沢昌二郎、滝沢智恵子、直井雅尚

5. 遺物の実測及び写真については、紙面の都合により全てを掲示し得なかった。

6. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記述を重視したため文章として掲載できなかったが、出土遺物及び図類と共に松本市立考古博物館が保管している。

# 目 次

第1章 調査の経緯.....	3
第1節 事業の経緯と文書記録.....	3
第2節 調査体制.....	3
第2章 遺跡の環境.....	5
第1節 清心遺跡の立地と自然的環境.....	5
第2節 周辺遺跡.....	9
第3章 清心遺跡の調査.....	11
第1節 調査の概要.....	11
第2節 遺構.....	12
1. 住居址.....	12
(1) 第1号住居址.....	12
(2) 第2号住居址.....	12
2. 竪穴状遺構.....	15
3. 集石.....	15
4. 土壙.....	15
5. 溝.....	16
第3節 遺物.....	33
1. 土器.....	33
2. 石器.....	66
第4章 砂原遺跡の調査.....	74
第5章 調査のまとめ.....	76

## 挿 図 目 次

第1図 調査地の位置(1).....	4
第2図 溝模式図.....	7
第3図 周辺遺跡.....	8
第4図 調査地の位置(2).....	10
第5図 第1号住居址.....	13
第6図 第2号住居址.....	14
第7図 積六状造構.....	17
第8図 積六状造構、集石1・2.....	18
第9図 土壙(1).....	22
第10図 土壙(2).....	23
第11図 土壙(3).....	24
第12図 土壙(4).....	25
第13図 土壙(5).....	26
第14図 土壙(6).....	27
第15図 土壙(7).....	28
第16図 土壙(8).....	29
第17図 土壙(9).....	30
第18図 土壙(10).....	31
第19図 溝.....	32
第20図 第Ⅱ群土器器形模式図.....	38
第21図 滝心遺跡を中心的にみた深鉢変遷図 .....	39
第22図 縄文土器実測図(1).....	41
第23図 縄文土器実測図(2).....	42
第24図 縄文土器実測図(3).....	43
第25図 縄文土器実測図4)-中世陶器実測図.....	44
第26図 縄文土器拓影(1).....	45
第27図 縄文土器拓影(2).....	46
第28図 縄文土器拓影(3).....	47
第29図 縄文土器拓影(4).....	48
第30図 縄文土器拓影(5).....	49
第31図 縄文土器拓影(6).....	50
第32図 縄文土器拓影(7).....	51
第33図 縄文土器拓影(8).....	52
第34図 縄文土器拓影(9).....	53
第35図 縄文土器拓影(10).....	54
第36図 縄文土器拓影(11).....	55
第37図 縄文土器拓影(12).....	56
第38図 縄文土器拓影(13).....	57
第39図 縄文土器拓影(14).....	58
第40図 縄文土器拓影(15).....	59
第41図 縄文土器拓影(16).....	60
第42図 縄文土器拓影(17).....	61
第43図 縄文土器拓影(18).....	62
第44図 縄文土器拓影(19).....	63
第45図 縄文土器拓影(20).....	64
第46図 縄文土器拓影(21).....	65
第47図 赤彩土器.....	66
第48図 石器実測図(1).....	70
第49図 石器実測図(2).....	71
第50図 石器実測図(3).....	72
第51図 石器実測図(4).....	73
第52図 砂原遺跡.....	75

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和60年10月9日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。
- 昭和61年1月10日 昭和61年度補助事業計画書提出。
- 4月4日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 4月25日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月30日 昭和61年度県営は場整備事業内田地区清心・砂原遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月6日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 6月9日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月15日 清心・砂原遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 7月29日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月18日 清心・砂原遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 11月27日 清心・砂原遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

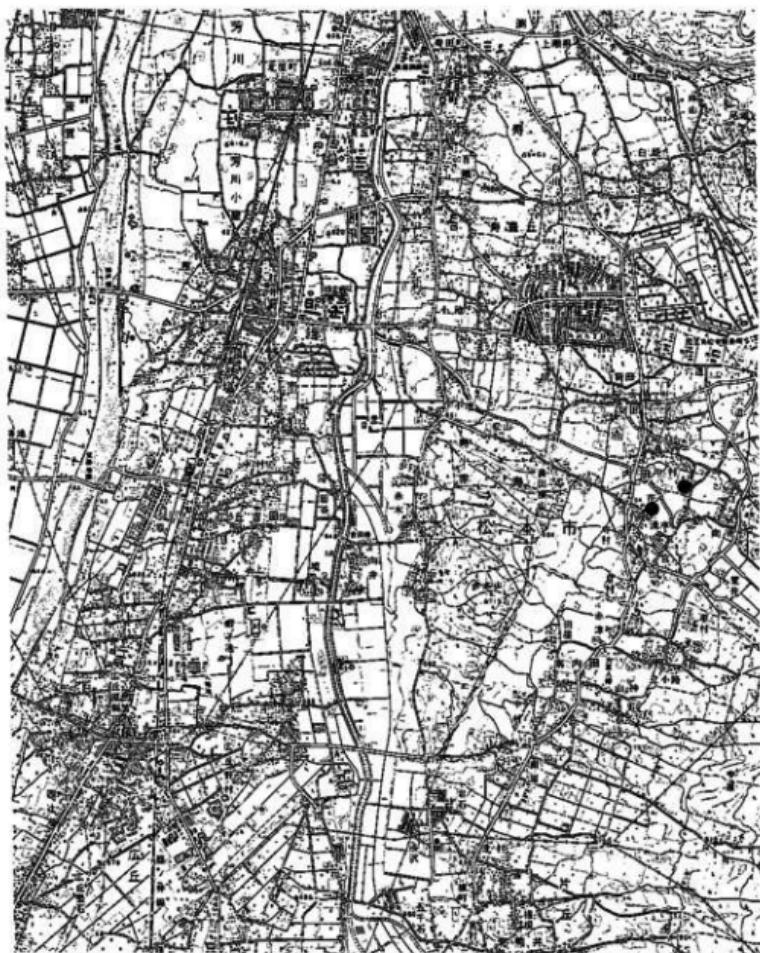
## 第2節 調査体制

団長：中島俊彦（教育長），担当者：神澤昌二郎（市立考古博物館長）

調査員：太田守夫，吉原博文，林田雅子

協力者：赤羽喜平，奥原富藏，青木雅志，五十嵐周子，伊丹早苗，倉科由加理，開嶋八重子，唐沢友子，河野りつ子，莊秀也，都々地尾伝，土屋君子，武居久美子，中島督朗，直井スガ子，丸山剛宏，丸山誠，丸山愛徳，丸山めぐみ，丸山麻子，丸山よし子，村山正人，百瀬久芳，横山信七，横山保子，柳沢丈志，渡辺久七

事務局：浜憲幸（社会教育課長）岩渕世紀（文化係長）熊谷康治（主事）直井雅尚（主事）



黒丸印 上方：清心道路、下方：砂原道路

第1図 調査地の位置 (1)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 清心遺跡の立地と自然的環境

#### 1. 位置と地形

本遺跡は標高710～720m、県道松本・片丘・塩尻線を東へ上った内田清心集落の南に位置している。南～南西を流れる塩沢川（距離100m）と北東を流れる舟沢川（距離200m）の現河床に挟まれた谷地状の地形面上にある。

この地形面は東方の内田雨堀遺跡面から続くもので、すでに述べた鉢盛山地西麓に広がる複合小扇状地面の一部である（松本市文化財報告No.23・34）。塩沢川と舟沢川によって埋積され、また浸食を受けた扇状地面である。扇状地面体からいえば扇央に当るが、堆積の繰返しが行われたため、本遺跡の周辺は扇央であるとともに扇端の性格をもっている。本遺跡近くの東上りや南下り手には、現在湧水もみられる。本遺跡面の傾斜は $\frac{40}{1000}$ で、扇頂の $\frac{100}{1000}$ や円辺の $\frac{60}{1000}$ にくらべ、多少ゆるやかになっている。

本遺跡と塩沢川右岸との比高は2～3mで、遺跡の南端はかつて塩沢川の河床の影響を受けたものと思われ、河床疊が存在する。現在は遺跡面から河床へは次第に下って、やや湿地性の水田に移行している。現在の塩沢川は左岸を激しく浸食し、砂原・北河原の地名をつくっている。したがって本遺跡面の傾斜方向は北半は一般的な北西、南半は塩沢川へ向けた南西～南となっている。

また東側には入家に沿って、南北性の小崖（比高1m）の走っているのがみられる。南は塩沢川の段丘崖に吸收されているが、北はさらに清心集落をぬけて舟沢川へまで続く。遺跡周辺に長泉寺・阿者利免の地籍名があり、これとの関係のものかとも思われる。しかし地形の変換線としても差支えがない。湧水や扇端の性格があるので、そのようにも考えられる。

#### 2. 遺跡の立地と堆積層

遺跡の堆積層は、鉢伏山地西麓に広がる複合扇状地であることは前に述べた。この西麓の斜面地形は、北部の六道一小池を結ぶ線と、南部の大沢川によって大きく三つの地域に分けられる。すなわち南から、(1)厚いローム層の堆積を多く残す地域（塩尻市南熊井・北熊井南半）、(2)小河流に浸食あるいは堆積されながらも、ローム層を残丘状に残す地域（北熊井～松本市内田）、(3)最も新しい氾濫原で、ローム層をほとんど破壊してしまっている地域（松本市寿）である。

本遺跡はこの(2)に属する、県道沿いの南内田の堆積層に共通しているのがみられる。

遺跡面の現況は畠地で、北方はリンゴ園、西北方は同じ畠地に続く、西方の畠地はやがて段丘崖を下り水田となっている。東（上方）は人家一棟を挟み、30mほどで水田となっている。最近は場整備が行われたために、かつての土地利用や自然地形も観察できない。南方はすでに述べた通りである。

発掘地面を南北を長辺とする四辺形と考え、腐植質で黒灰色～黒色の表土を除いた地面は次のようにある。およそ北半は黄褐色土（一部赤褐色土）、表面に角礫の細礫を含み、下部は二次ロームで石英閃緑岩の砂分を含んでいる。N-40°-Wの線を境にして南半の堆積へ変化している。南半は北から赤褐色～褐色土で、石英閃緑岩の細礫が散在している。この状態はおよそ中央近くで東西線を境にし、西へ南西に移ると礫が多くなる。褐色土層は薄くなり、厚さ70cmを越える礫混り土層は、大・中・小の角礫多数に砂を混える。また亜角礫・亜円礫・円礫も含まれるようになり、塩沢川に近くなる程、礫が多くなっている。礫の多い部分には流れの影響と考えられる地層の澗入があり、端近くなると下底から湧水がみられる。礫には石英閃緑岩のはか、砂岩・礫岩・ホルンフェルスが混り、明らかに塩沢川の影響が及んでいるのがわかる。

土層の断面は、これ以上の深さを発掘として必要がなかったし、また北半のローム質土壤は、扇状地の各所でみられる二次ロームの堆積で、相当の深さまで変化がないとみられた（最下部はローム層の可能性がある）。南半の礫層も70cmの深さを越えたが、礫層に変化がないため、いずれもそこまで調査を止めた。

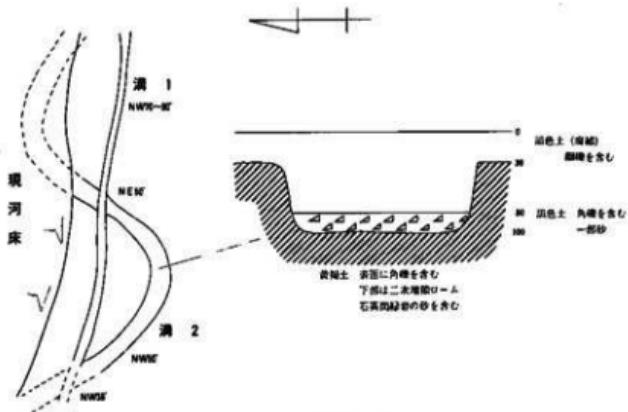
以上から考察できることは、北半の赤～黄褐色土層は、扇状地を下る河流の浸食を逃れた背の部分に当り、二次ロームの堆積當時に石英閃緑岩の礫を含んだものと思われる。その流れは、赤褐色・褐色土層とともに舟沢川の影響による可能性が強い。これに対し南半は、礫層の礫の種類からみて塩沢川の影響によると思われる。

したがって高所の平安・中世時代の遺構については、地形の形成後であることは確かである。低所の縄文期の遺物は、一度埋没された可能性がある。

### 3. 地形の形成

次に地形の形成の順序を追ってみると、下記のように考えられる。

1. 舟沢右岸のローム層下の礫層
2. 波田ローム層の堆積及び残片——八幡原八幡社・法船寺・舟沢右岸・グランド・赤木山・南内田の大宮八幡社など
3. 二次ロームの堆積と石英閃緑岩の礫——舟沢川 表土の形成
4. 遺跡南半の礫層——塩沢川の浸食と堆積
5. 塩沢川の現河床の氾濫 塩沢川の左岸——砂原・北河原、舟沢川の右岸



第2図 溝模式図

#### 4. 黄褐色土層中に発見された曲流(溝)について(第2図)

発掘地の北端でいずれも西方へ下る、二条の交差した溝が発見された。一方はN-70°-Wのほぼ直線状であり、他方はN-50°-EからN-50°-W-N-30°-Wの反転する曲流で、前者(溝1)が上位、後者(溝2)が下位となって、二ヶ所で交差していた。また現在の小流は溝1に沿うように、その北側を1~2mの距離をおいて、ほぼ直線状に流下している。

溝1・2いずれも、表土の黒色土(厚さ30cm、細礫を含む腐植土)の下の黄褐色土層(表面に角礫を含み、下部に石英閃綠岩の砂を含む二次ローム)に掘り込まれた溝である。

溝1は幅平均50cm、深さ30cmぐらいの溝で、溝2は幅平均1m、深さ70cmの溝である(いずれも表土を除く)。溝2の底部には深さ20cmほどの角礫の細礫や砂を含む黒色土が堆積し、流れ込んできたと思われる土器片(平安期・中世)や自然堆積とみられない石が発見された。

さて溝1・2・現河流が自然流であるか人工の溝であるかの問題であるが、いずれの河床も堆積物が乏しいため、判断が難しい。いずれ発掘後最終的な結論ができると思われるが、観察したところを述べてみる。

現河流の上流は前述のように、30m先からは場整備された水田地域となっていて、自然の地形は失われている。新しい用排水路が取り付けられてほとんど平坦化し、この河流の上流もこの用排水路に入っている。30m先から道路下と人家裏に入つて小流となり、遺跡沿いでは1m幅に広がり、やがて谷へ下っている。九月の季節に水量はほとんどないところから、現在は明らかに排水路である。ただ上流へ続く用排水路が平坦面の中に、幾分の凹地形を残しているところから、かつてはこの筋に自然流を推定することができそうである。そう考えると、溝1・2も堆積の末期における排水の通路として発達していたもののように考えられる。谷から発掘地近くまでには、すでに谷頭の浸食がみられる。ただ歴史的に利用されたものかどうか不明である。



- |         |          |          |
|---------|----------|----------|
| 1 長泉寺遺跡 | 5 朝迦堂遺跡  | 9 大久保遺跡  |
| 2 エリ穴遺跡 | 6 赤木山遺跡群 | 10 雨烟遺跡  |
| 3 一ツ塚遺跡 | 7 小池遺跡   | 11 五斗林遺跡 |
| 4 八幡平遺跡 | 8 棚峯遺跡   | 12 三郎城遺跡 |

第3図 周辺遺跡

## 第2節 周辺遺跡

・鉢伏山西麓から流れる小河川によって形成された複合扇状地の緩斜面には縄文時代中期を主体として縄文時代早期から後・晚期、平安時代、中世にわたる遺跡が点在している。この緩斜面に塩沢川をはさんで左岸に砂原遺跡、右岸に清心遺跡がある。本遺跡北東の釈迦堂遺跡からは縄文時代早期の押型文土器が出土している。南東上方の五斗林遺跡でも早期押型文、前期土器が出土している<sup>11)</sup>。塩沢川の段丘上にある南堀遺跡では構造改善事業に先立ち昭和55~56年度に発掘調査が実施され、縄文時代中期の住居址19軒と多数の小豊穴が検出された<sup>12)</sup>。塩沢川左岸には縄文時代後・晚期のエリ穴遺跡があり、昭和42~45年度に藤沢宗平氏と松本深志高校地歴会が発掘調査を行い晚期前半に属すると思われる豊穴状造構1軒が検出され、多量の土器と耳飾りが出土したこと有名である。一ツ塚、長泉寺、宮ノ下遺跡からは縄文時代中期の土器と平安時代の土師器が出土している。

本遺跡西方の寿区赤木に所在する赤木山には至る所から遺物の出土がある。縄文時代中期を主体として縄文時代早期から後・晚期、弥生時代中・後期、古墳時代、平安時代にわたる十数ヶ所の遺跡が確認されており赤木山遺跡群と総称されている。これらの遺跡のうちで特筆すべきことは原度前遺跡の縄文中期初頭の土器や石製品（石冠）、清水林遺跡の独鉛石、北原遺跡の有孔玉石などである<sup>13)</sup>。また昭和60年度に発掘調査を行った石行遺跡では縄文時代晩期末の土器一括廐棄遺構が検出され多量の土器が出土したほか、古墳時代前期の住居址群、平安時代の住居址、中世火葬墓等が発見された。

前田・木下遺跡は昭和58年度に県営ほ場整備に伴う緊急発掘により実施され、縄文時代中期の住居址11軒、弥生時代後期の住居址1軒、平安時代の住居址1軒、中世の住居址1軒等が検出された<sup>14)</sup>。横山城遺跡は昭和41年度に藤沢宗平氏と深志高校地歴会により発掘調査が行われ、弥生時代中期末の住居址が検出された。

白神場遺跡は昭和59年度に県営ほ場整備に伴う緊急発掘により実施され、縄文時代前期末の住居址6軒が検出され小規模な集落が明らかになったほか松本市初の方形周溝墓3基、古墳時代前期の住居址3軒、同中期の住居址1軒が検出された。北原遺跡からは縄文時代早期後半の土器を主体として前期末の土器も出土している<sup>15)</sup>。

小赤遺跡は昭和57年に緊急発掘が実施され近世～現代の暗渠排水溝址、中世の鍛冶屋場遺構が発見されている<sup>16)</sup>。赤木山西方の田川流域には縄文中期、弥生後期、平安期の遺物が出土している。

赤木山北方の平坦地にある小池遺跡では、土師器、須恵器が採集されている。

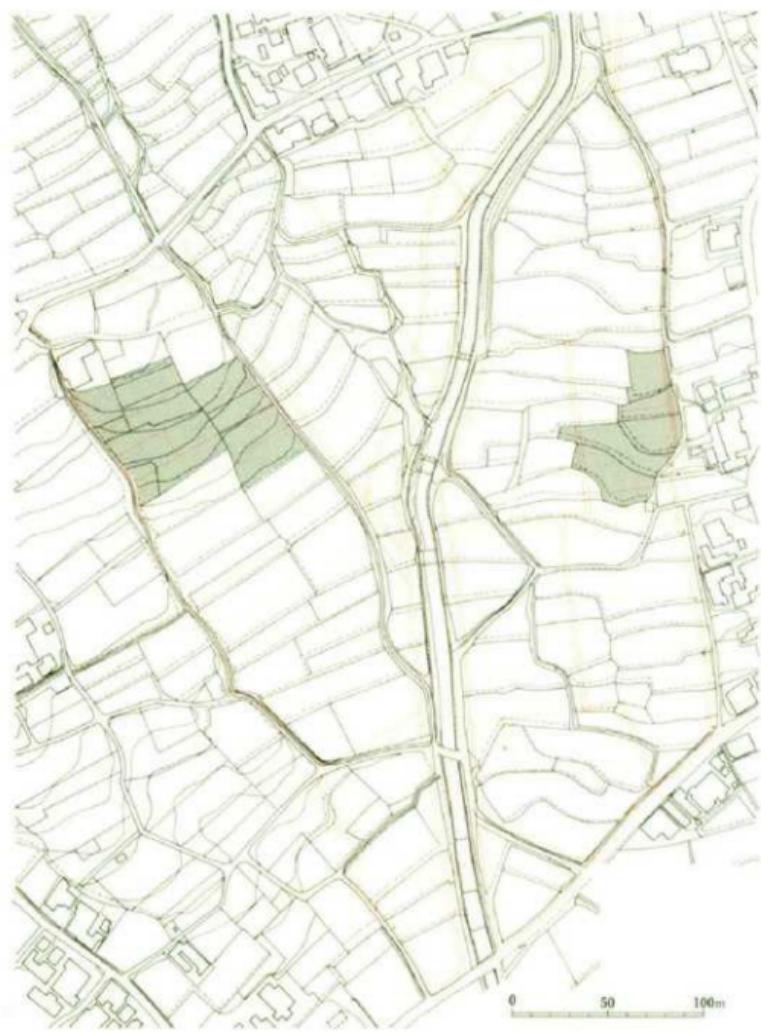
註 ⑪ 「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌」第二章

⑫ 松本市教育委員会『松本市内田削組遺跡』 1981・1982

⑬ 赤木山遺跡群についての、松本市教育委員会『松本市赤木山遺跡』1983に詳しい。

⑭ 松本市教育委員会『松本形都田・木下遺跡』 1984

⑮ 松本市教育委員会『松本市赤木山遺跡群』 1985



第4図 調査地の位置 (2)

## 第3章 清心遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

今回の調査地は、松本市大字内田2220番地に所在している。調査予定面積は5,000m<sup>2</sup>、実際に調査できたのはこのうち4,000m<sup>2</sup>であった。調査は機械力を導入した耕作土の除去に始まり、人力による排土整理、遺構検出、遺構の掘り下げという順に進行した。またこれらと平行して、各遺構の断面観察や平面測量用の基準点の設置を行い、完掘した遺構から平面測量を実施していった。調査地全体を覆う平面測量図の3mごとの南北方向と東西方向のラインは北および東の端からそれぞれ0・3・6……と命名し交点はその数字を南北方向の物から連記して示してそれらによって作られるグリッド名は北東隅の交点の名称をもってあてた。

調査の結果は次のとおりである。発見された遺構は竪穴住居址2、竪穴状遺構1、土壙111、集石2、溝6、遺物は多量の縄文前期土器、石器および数点の中世陶器であった。2軒の竪穴住居址はいずれも円形のプランを呈し、縄文前期諸磧a及びb式の土器を出土しており、近接した時期に存在したものであろうことを窺わせた。竪穴状遺構は検出時の平面形態は先の竪穴住居址と同様であったが掘り下げの結果遺物の出土がなく、多量の礫が集中してあったため、周辺の土壙に伴う時期のものと推定し、住居址とはみなさなかった。土壙は覆土の状態から明瞭に2種に分けられた。その1つは調査地北半分に分布する平面形が隅丸の方形、長方形を基調とするプランのもので、一括し埋め戻されたと思われるロームブロックを多量に含む単層ないしは2~3層からなる覆土をもっていた。他方は南半分に分布し平面形が円形で多くは自然埋没の状態を示して縄文土器片を含んでいるものであった。前者は他の遺跡の例からみて中世に属するもの（たぶん墓址）であり他は縄文時代のものとみてよかろう。更に縄文時代のものの中には竪穴住居址と同じ前期後半の土器片を出土するものと、中期末の土器を出土するものの2者があった。集石は南半部の東端と西よりの2ヶ所で発見された。東端のものは半分調査区域外へかかるが円形プランを呈し、石の中には被熱していたものもあり少量の縄文前期後半の土器が出土した。暗渠の一種とみられる西よりの方の集石は黒色土中に列状に大きな石が並ぶものであるが、層位的にみて中世以降のものと推定できる。溝は調査地北部に集中して存在し、幅、深さに大小があって、下層に砂礫質の部分を伴った黒色土が覆土となっていたため、自然の流路であった可能性が大きい。ただし溝1の覆土中からは東海系陶器の一括品が出土しているため、時期的には中世のものと考えてよかろう。

以上のように、今回は調査地南半を占める縄文前期の竪穴住居址と土壙及び縄文中期末の土壙、調査地北半を占める中世の竪穴状遺構、土壙と溝という3時期の遺構が調査され、それに伴う遺物が得られることになる。

## 第2節 遺構

### 1. 住居址

#### (1) 第1号住居址

遺構 S57~60-W45~48グリッドに位置し、平面形は径3.9~4.2mの不整な円形を呈する。黄色味の強いベースに掘り込まれていたので、検出の際、プランは明瞭に把握することができた。壁の残存状態は良いが、傾斜は緩やかで、そのまま床へ移行していくところさえみられる。北側は一部で二段になっている。床は地山である疊混りのローム質土をそのまま用いており、壁の傾斜から連続して、中央部へ向っていくぶん窪んでいる。

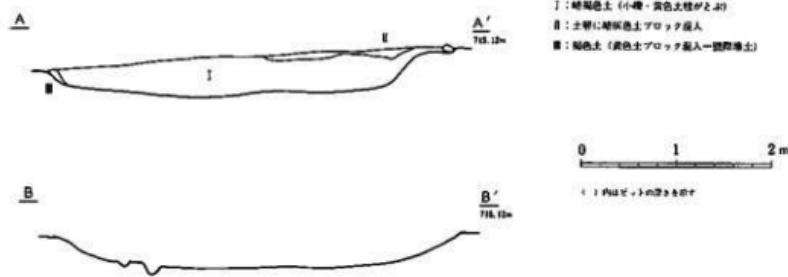
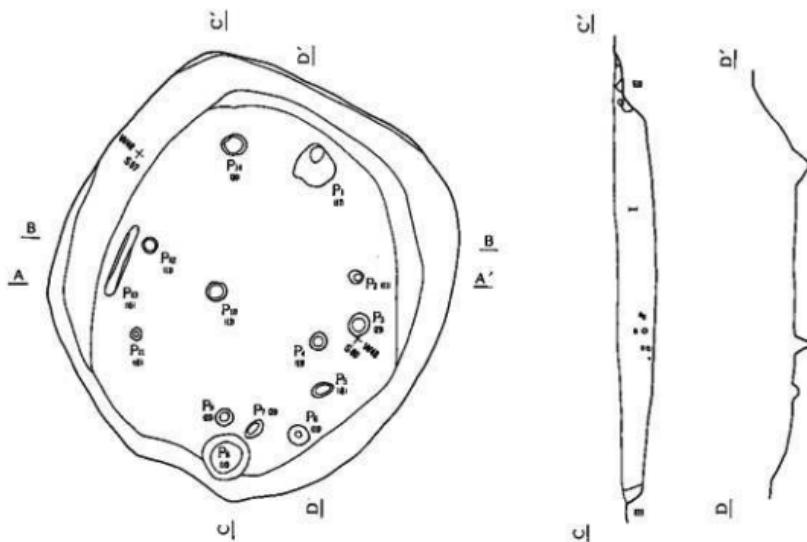
ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>まであり、ほぼ壁に沿って円形に配列している。( )内は床面からの深さを示す。炉址に相当するものは検出できなかった。

遺物 覆土中より少量の土器、石器が出土している。土器は縄文時代前期後半、諸磯a式・b式に属するもので、一括品は少ないが、5点(1~5)を図示することができた。石器は、黒曜石製の石鏃2点、ビエス・エスキュー、石核が各1点ずつ出土した。これらの遺物は覆土中に散在しており、特別な出土状態を示していない。本址の所属する時期は、出土土層からみて、縄文前期後半、諸磯b式期に求めることができよう。

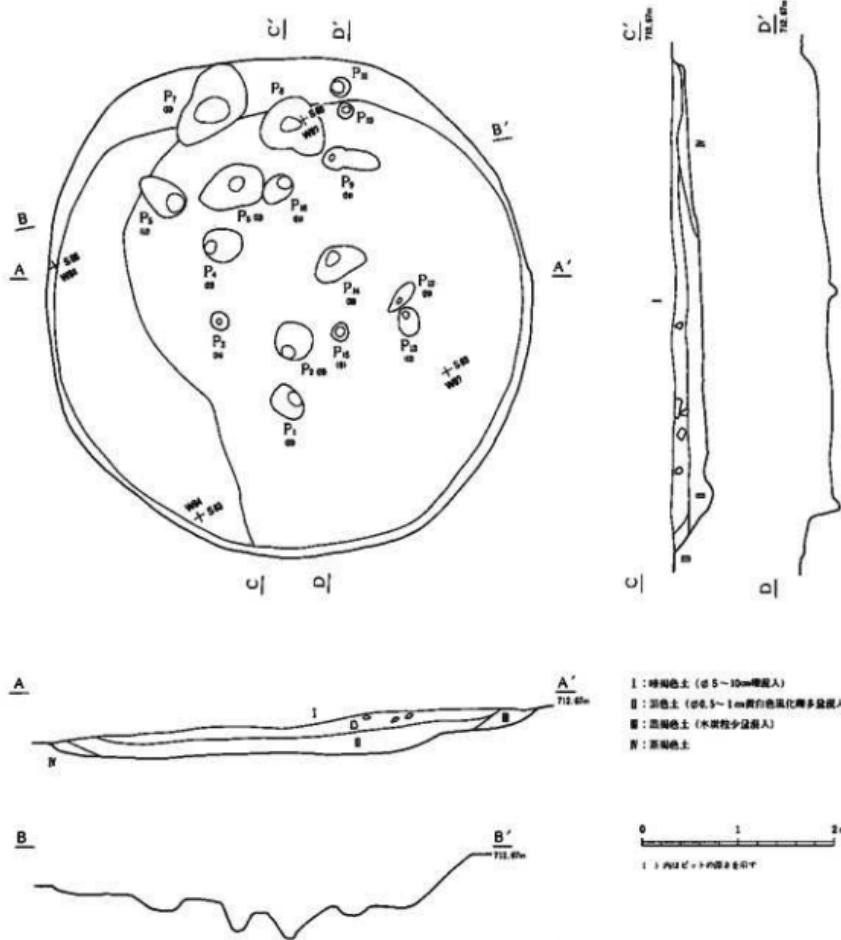
#### (2) 第2号住居址

遺構 S63-W84に位置し、平面形は直径5m程の円形を呈する。この一帯には、黒色土に覆われた東南方向に走る浅谷状の地形があり、本址の北側1/4程がこれと重なりあっていて、上面からのプラン検出是不可能であった。このため試掘溝をいれて、床から壁への立ち上がり部分を探ってプランを確定した。従って、北側1/4程の壁ははっきりしない。他の壁の残存状態は良好で、かなり緩やかな傾斜をもって床面へ至っている。床面は若干の起伏があり、全体的には北へ緩傾する。最も外周にあるピットで囲まれる範囲の床は非常に良好で、ベースである疊混黄色土(再堆積のローム)を直接用いた堅緻なものであった。ピットはP<sub>6</sub>まであり、大形のP<sub>1</sub>を除くと、およそR<sub>4</sub>を中心にして、二重の円形を配列しているように見える。炉址については位置的にみてR<sub>4</sub>を考えたが、焼土・炭等の痕跡が認められず、他に該当するものも求められない。

遺物 覆土上層から下層にわたり多数の土器・石器が出土した。また本址西壁外30cm位のところからも、一括品土器が出土した。土器には縄文時代前期の黒浜式、諸磯a式及びb式があり、覆土上、中層からのものに諸磯b式が、より下層にa式、黒浜式のものが多い。西壁外のものも前期諸磯a式のものである。これらのうち8点を図示できる(6~13)。石器は内容が豊富で石鏃15点、石匙1点、打製石斧1点、凹石1点、ビエス・エスキュー5点が出土している。遺物の出土状態は全般的にみると覆土中から、偏りなく出土したが、図示した土器は同一個体が大破片となって、まと



### 第5圖 第1号住居址



第6図 第2号住居址

まっていた。本址の営まれた時期については、出土土器がみれば一段階新しい一括品があったものの、縄文前期後半諸磧8式と推定される。

## 2. 穴状遺構

遺構 中世のものと推定される土壙が、周辺に散在しているS24~27-W51~54グリッド一帯に発見された。平面形は直径3.3~3.8mの規模をもつ、不整な円形を呈している。壁の掘り込みは5~15cm位しかなく、あとは凹凸に富み軟弱で、床とはとても認められない、底面が中央部へ向かって窪んでいく状態であった。また、本址の覆土中には礫が多く、特に北半部には10~30cm大の礫が集中し、この礫は本址底面下まで続いている。すべてを取り除くと、2×1.3m、深さ0.5mの楕円形のすり鉢状の底をもつ大きな落ち込みとなった。

遺物 本址から遺物の出土はない。時期については、覆土の状態や、周辺の遺構との関係から考えて、中世に営まれたものと推定している。

## 3. 集石

### (1) 集石1

S72-W54グリッドにあり、東半は調査区域外へかかるが、直径1.2m位の円形になると想定される。地山に深さ15~20cmの窪みを掘り、その中に径5cm位までの礫を浮き気味に積み上げている。礫は本址が偶然調査区の境界にかかり、地山以上を削平されなかつたため、倍近い高さまで積まれている状態で観察できた。これらの礫は亜角礫が割れたものが多く、またかなり多数に加熱をうけた痕跡があった。遺物は上面から少量の縄文前期土器と石鏃が出土した。それらや周辺の遺構からみて本址は、縄文時代前期の住居址、土壙に伴う集石炉の一種であると想定される。

### (2) 集石2

S60-W78~81グリッドに位置し、すぐ南面には第2号住居址がある。この周辺は渓谷状の地形を疊り混じる黒色土が覆っている部分で、本址もこの黒色土の中のかなり高いレベルから発見された。20~40cmの大きな亜角礫を長さ4m、幅0.7mの範囲に2列にならべたような形態をとり、部分的にはその上に蓋石とみられる置き方をされているものがある。隣接する第2号住居址を検出した面では本址の掘り方等は全くわからず、それよりも上層の遺構であるという感をうけた。遺物は全くない。本址の時期および性格は、調査中に雨が降った後など周辺より湧水があったことなどから考えて、中世以降の暗渠に關係する遺構とみた。

## 4. 土壙

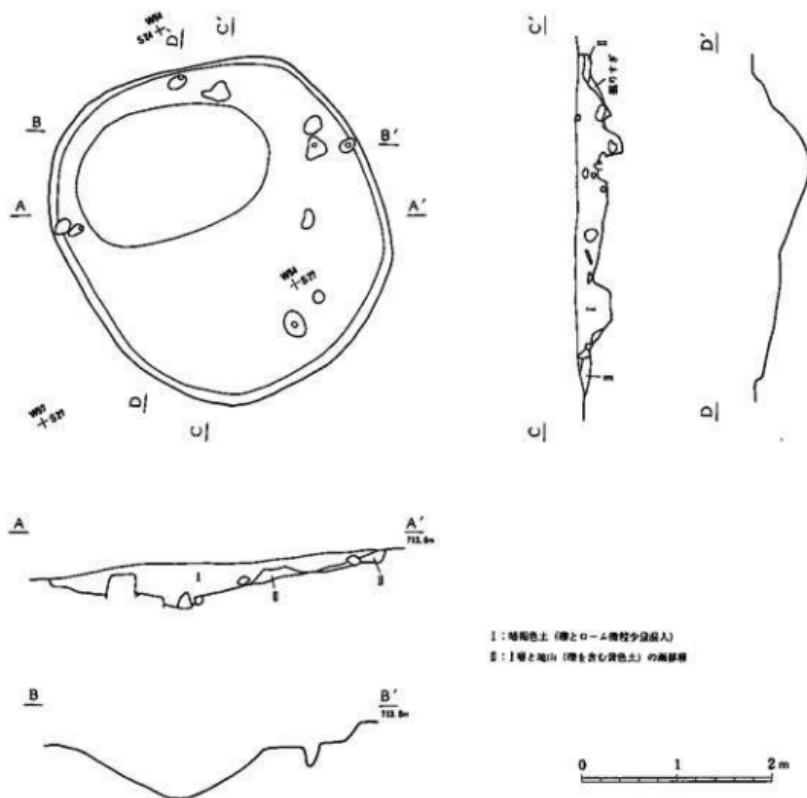
調査地各地から109基が検出されており、今回の調査を代表する遺構である。形態は、平面形に隅丸方形、長方形、円形、楕円形等の各種がみられるが、これらは断面形や覆土の様子、ひいては

遺構の時期と密接に関係している。即ち、平面方形、長方形を基調（稀に円形）として、断面形が長方形か壁の傾きの急な台形を呈し、覆土がロームブロックやローム粒を含む単層、または一度で埋められたとみられるもの（a類）、円形、楕円形、または不整円形で自然埋没状態を示すもの（b類）の2者である。a類からは遺物の出土例がないが、遺構群としてみた場合、同程度の土壌が軸をそろえて存在する様子などから、他遺跡に類例を求めるに、市内島立の南糞遺跡に似た例があり、その所見から推量して、中世の墓址と考えられる。一方、b類は縄文土器片を出土しているものが多く、竪穴住居址の時期（縄文前期後半）と近接する頃掘られたものと考えている。ただし、b類の中には縄文中期末の一括土器を出土したものもあり、この点から見ると、前期後半と中期末の土壌が混在していることが窺われる。このa・b類にあてはまらないものも若干あるが時期は基本的には、いずれかに属するものであろう。

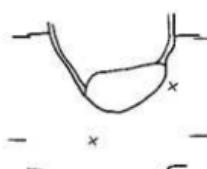
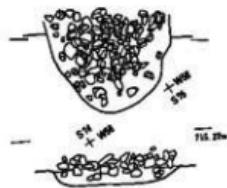
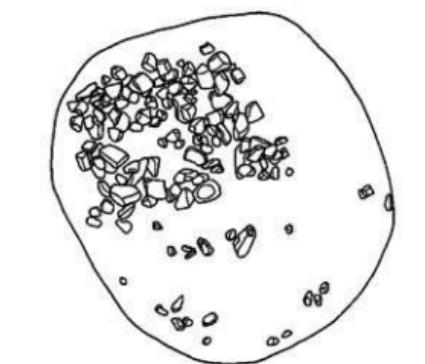
土壌の全体的な分布は調査地中央を境に、北半にa類、南半にb類となっているが、a類の方が集中する傾向があるようだ。各土壌の詳細なデータと出土遺物は、一覧表に譲る。

## 5. 溝

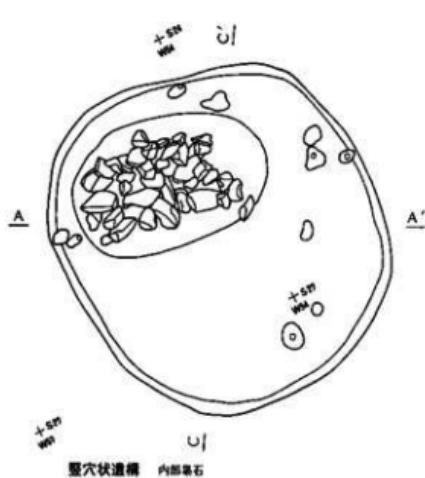
調査地北端部に、大小の溝が切り合って検出された。溝1は、調査地北端に沿って西へ流下する幅0.7m、深さ0.5mのもの。溝2は、幅が3.6m前後の太いもので、調査地北隅から現れて、しばらく南西へ向った後、90°近く向きを変えて西北西へ流下するもので、溝1に切られている。この溝2に、南東から流れ込む溝3（幅1.5m）、南西から流れ込む溝4（幅0.5m）、この溝4に平行する溝5がある。溝1は、東部は深さが50cm程もあるが、西へ行くに従い浅くなる。溝2は緩い弧を描く断面形を持ち、深さは約60cm、河床一帯に礫が点在するが、屈曲部の埋土中の、かなり浮いた位置に集石状のものがある。溝4、5は10cm以内の浅いものとなっている。遺物は、溝2の上層から中世の東海系鉢の大破片が出土しており、遺構のほぼ下限の時期を知ることができる。これらの溝の生成等については、第2章に詳しいので参照されたい。



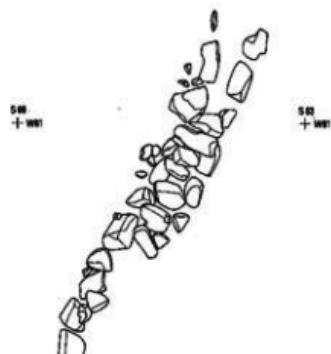
第7図 穴状構造



集石 1



豊穴状造構 内部集石



集石 2

50  
+ WM

0 1 2 m

第8図 豊穴状造構、集石1・2

土 壤 一 覧 表

番号	測定図	位	置	平	面	形	規	幅	深	度	の	付	備	考
				面	形		面	幅	深	度	の	付	備	考
1	17	S 21	W 33	圓	九	方	形	長方形 133×111	30	a				
2	10	S 21	W 39	長	方	形		長方形 118×90	35	a				
3	11	S 18	W 39	円	一	形		長方形 104×94	34	a				
4	16	S 18	W 39	圓	九	方	形	長方形 75×65	18	a				
5	16	S 12	W 49	不整	倍	四	形	長方形 110×81	34	a				
6	13	S 15	W 42	圓	九	方	形	長方形 85×70	7					
7	11	S 12	W 42	円	一	形		長方形 120×103	45	a				
8	15	S 12	W 45	椭	円	形		三角形 125×78	20	a				
9	16	S 15	W 45	不整	円	形		台形 112×90	46	a				
10	11	S 12	W 48	方	一	形		台形 65×63	25					
11	16	S 15	W 48	長	方	形		台形 127×81	22	a				
12	12	S 18	W 45	円	一	形		台形 90×83	26	a				
13	11	S 18	W 48	圓	九	方	形	他円形 80×74	20	c?				
14	10	S 21	W 48	圓	九	方	形	台形 109×67	22	c				
15	13	S 18	W 51	不整	円	形		台形 80×66	18	a				
16	12	S 18	W 51	円	一	形		台形 111×95	26	a				
17	10	S 15	W 51	方	一	形		台形 106×90	20	a				
18	9	S 18	W 54	圓	九	方	形	台形 150×88	10	a				
19	18	S 6	W 51	方	一	形		長方形 217×195	42	a				
20	12	S 0	W 48	不整	円	形		台形 164×132	18	a				
21	9	S 18	W 57	長	方	形		長方形 148×88	25	a				
22	11	S 18	W 54	不整	倍	四	形	51×48	25	b				
23	10	S 30	W 36	長	方	形		長方形 120×80	18	a				
24	10	S 36	W 39	方	一	形		長方形 102×87	36	b				
25	17	S 33	W 39	不整	倍	四	形	長方形 150×87	19	a				
26	13	S 30	W 42	椭	内	形		長方形 93×68	15	b				
27	10	S 30	W 45	方	一	形		長方形 107×90	20	a				
28	11	S 27	W 42	方	一	形		半円形 80×62	26	a				
29	15	S 27	W 45	椭	内	形		台形 (160)×104	18	a	炭化物			
30	9	S 27	W 45	方	一	形		長方形 130×117	10	a				
31	9	S 27	W 45	圓	九	方	形	圓九方形 167×95	5	a				
32	9	S 27	W 48	長	方	形		長方形 160×85	12	a				
33	11	S 27	W 45	方	一	形		台形 83×73	13	a				
34	14	S 24	W 45	不整	円	形		台形 65×61	8	?				
35	9	S 24	W 45	長	方	形		長方形 146×83	16	a				
36	9	S 30	W 48	不整	長	方	形	長方形 161×95	25	a				
37	9	S 30	W 51	方	一	形		長方形 163×155	16	a				
38	17	S 33	W 42	不整	倍	四	形	台形 135×97	23	b				
39	14	S 36	W 42	円	一	形		台形 81×61	15	b?	39, 41と重複			
40	16	S 36	W 42	不整	円	形		半円形 92×81	19	b?				

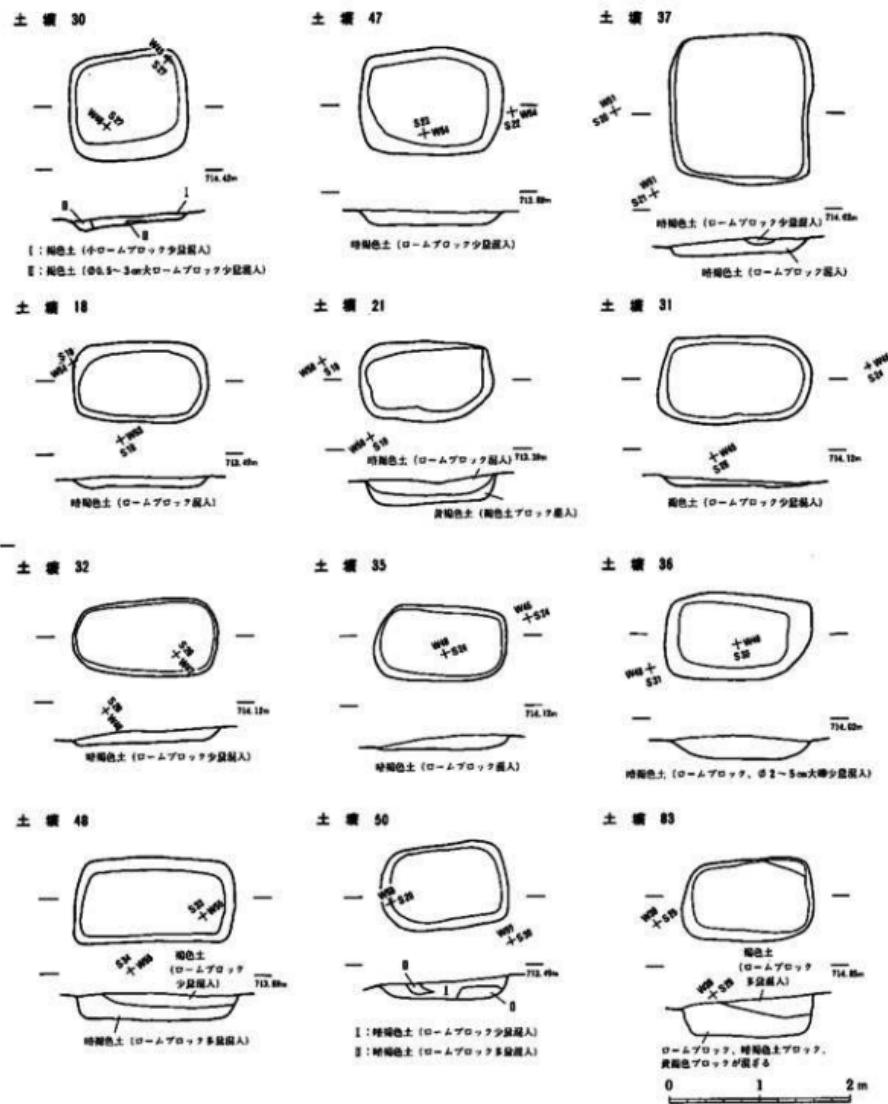
番号	推定年	位	置	正面形 規格(cm)	側面形 深さ(cm)	覆土の 条件	備	考	番号	推定年	位	置	正面形 規格(cm)	側面形 深さ(cm)	覆土の 条件	備
42	17	S33	W48	不整方形 185×145	台形 19	a			62	18	S48	W75	楕円形 224×126	台形 30	b	縄文土器(220)
43	16	S39	W48	隅丸方形 86×80	半円形 22	a			63		S51	W54	円形 96×(90)			
44	15	S36	W54	不整椭円形 170×78	台形 15	a			64	12	S43	W48	円形 125×108	台形 35	a	
45	12	S42	W54	円形 172×146	台形 21	b			65	10	S54	W45	隅丸方形 110×80	台形 20	b?	
46	10	S30	W54	長方形 183×87	台形 10	a			66	16	S51	W48	方形 90×87	長方形 10	a?	
47	9	S33	W54	方形 158×118	台形 15	a	炭化物		67	11	S51	W45	方形 65×61	台形 15	b	
48	9	S33	W57	長方形 177×93	台形 30	a			68	16	S48	W48	不整円形 116×107	長方形 30	b	
49	16	S33	W57	不整円形 (100)×85	台形 11	a			69	15	S45	W42	楕円形 108×54	長方形 15	b	
50	9	S30	W57	隅丸方形 142×95	台形 20	a			70	13	S42	W39	円形 96×90	半円形 30	b	
51	13	S30	W60	円形 80×76	三角形 25	b?			71	13	S75	W64	円形 98×95	台形 13	b	
52	12	S33	W60	円形 104×90	台形 25	a			72	17	S72	W75	不正規円形 134×63	台形 16	b	
53	17	S51	W54	楕円形 182×117	半円形 30	b			73	15	S75	W75	楕円形 158×78	長方形 25	b	焼石あり 縄文土器(221-222)
54	18	S51	W57	楕円形 260×106	台形 28	b	縄文土器(202-203 204-205)		74	13	S72	W75	円形 88×86	方形 60	b	縄文土器(223)
55	18	S48	W63	不整円形 230×169	長方形 21	b	縄文土器(206)		75	14	S72	W75	円形 51×51	台形 31		縄文土器(238)
56	10	S48	W66	隅丸長方形 196×63	台形 20	a			76	13	S75	W72	円形 95×92	楕円形 15		造構ではない可能性
57	12	S60	W54	円形 93×90	方形 68	b	縄文土器(207)		77	15	S72	W69	楕円形 100×69	台形 10	b	焼石あり 縄文土器(239-240)
58	12	S57	W57	円形 108×100	長方形 38	a	縄文土器(208-209 210)		78	14	S75	W69	円形 76×75	長方形 10	c	
59	12	S57	W60	円形 125×120	長方形 64	b	縄文土器(211-212-213 214-215-216-217-218) 石盤(18) 石錐(35)		79	12	S75	W66	円形 120×106	台形 24	b	縄文土器(241)
60	12	S54	W66	楕円形 155×120	半円形 35	b			80	15	S21	W33	楕円形 77×50	台形 25	b	黒曜石
61	18	S51	W69	不整椭円形 225×190	台形 32	b	打製石斧(50)		81	14	S21	W36	円形 72×61	長方形 19	b	

番号	推定	位	置	平画形 規格(cm)	断面形 深さ(cm)	出土の 特徴	備	考
82 17	S24 W36	方 形	長方形	105×103	38	a		
83 9	S24 W39	横九長方形	長方形	144× 90	40	a		
84 14	S24 W36	円 形	長方形	56× 55	8	a		
85 10	S27 W39	方 形	長方形	105× 85	30	a		
86 16	S27 W39	不整円形	台 形	65× 56	26	b		
88	S24 W45	円 形		40× 35		未記		
89 16	S30 W51	不整方形	台 形	66× 55	11	a		
90 10	S33 W54	長 方 形	台 形	113× 63	5			
91 14	S33 W54	円 形	三角形	59× 54	16	b		
92 13	S24 W54	横九長方形	半円形	85× 63	22	a		
93 17	S21 W54	横 圆 形	長方形	125× 52	25	a	94と重複	
94 17	S21 W54	円 形	長方形	55× 42	23		93と重複	
95 11	S51 W63	横九方形	長方形	63× 74	22	a		
96 15	S54 W42	円 形	横円形	60× 40	22	b		
97 10	S60 W60	長 方 形	台 形	165× 67	26	b		
98 15	S39 W48	横 圆 形	台 形	68× 45	15	b		
99 11	S36 W30	長 方 形	長方形	90× 65	8	b		
100 15	S27 W24	横 圆 形	台 形	113× 70	16	b		
101 15	S21 W27	横 圆 形	台 形	93× 63	13	a		
102 17	S39 W15	不整横円形	台 形	150× 86	23	b	縄文土器(242)	
103 15	S66 W81	横 圆 形	台 形	223×106	25	b		
104 18	S75 W87	半 圆 形	台 形	270×(66)	52	c	ロームマウン'Y? 縄文土器(243-244- 245-246-247-248)	
105 12	S66 W90	円 形	半円形	138×110	32	a	縄文土器(249-250)	
106 14	S72 W63	円 形	三角形	80× 77	20		縄文土器(251) (前期)	
107 13	S72 W63	横 圆 形	横円形	118× 90	30			
108 14	S75 W63	円 形	長方形	80× 74	6			
109 13	S75 W63	円 形	横円形	90× 83	15			
110 14	S72 W69	円 形	横円形	43× 41	10		縄文土器(252-253)	
111 13	S72 W69	横 圆 形	三角形	105× 80	30		縄文土器(254-255) (後期)	

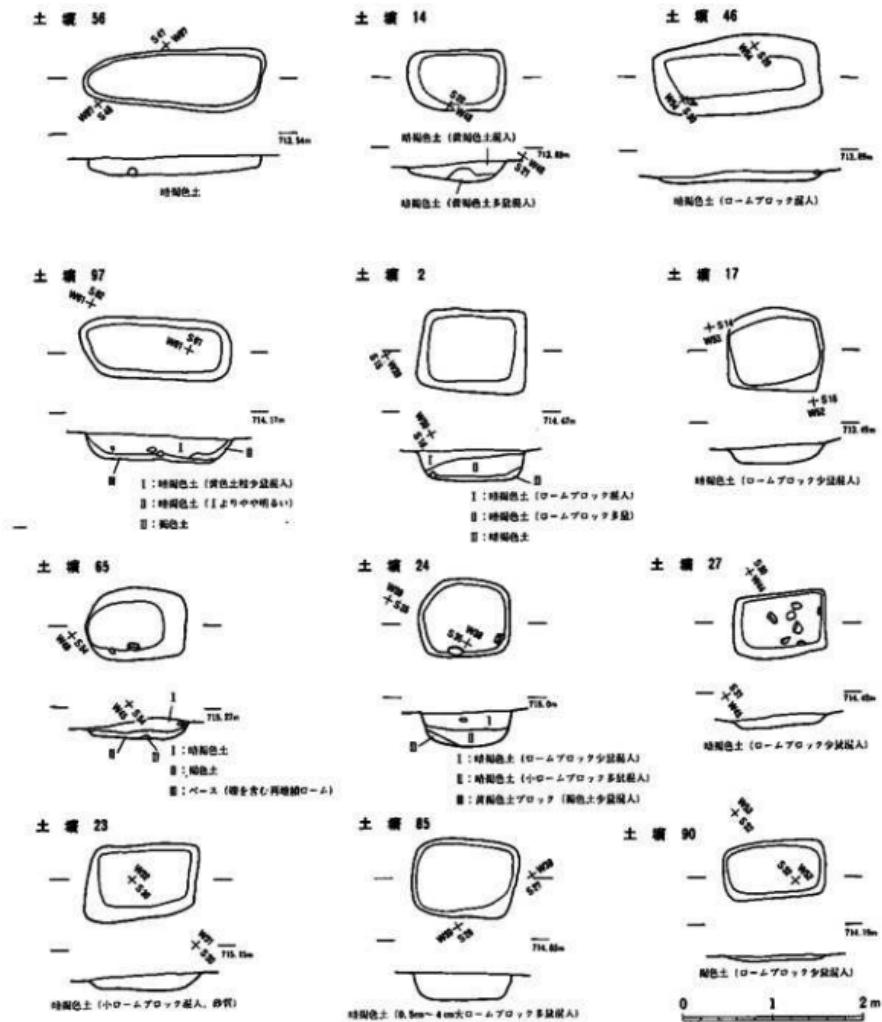
a : 単層一括埋没又はそれに類似

b : 自然埋没

c : その他

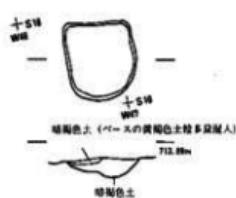


### 第9回 土 壤 (1)

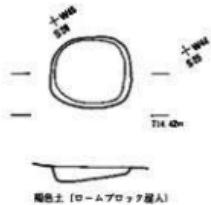


第10図 土 壤 (2)

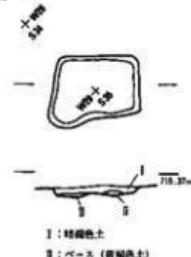
土 壤 13



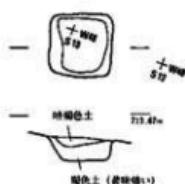
土 壤 33



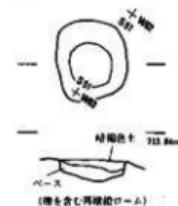
土 壤 99



土 壤 10



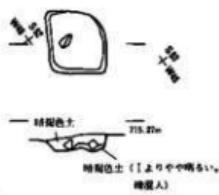
土 壤 95



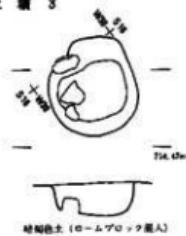
土 壤 28



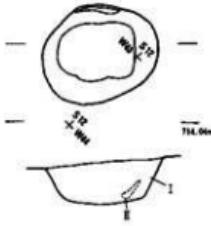
土 壤 67



土 壤 3



土 壤 7

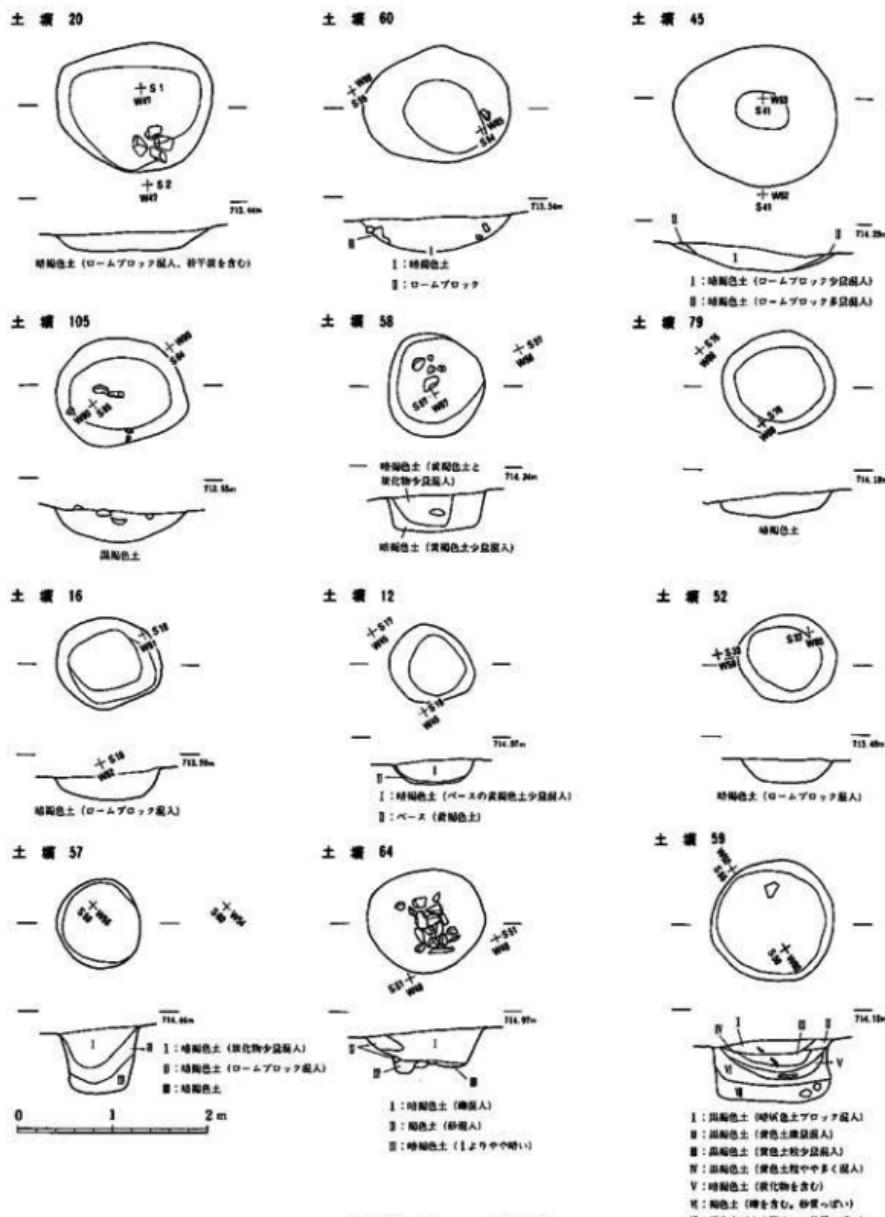


土 壤 22

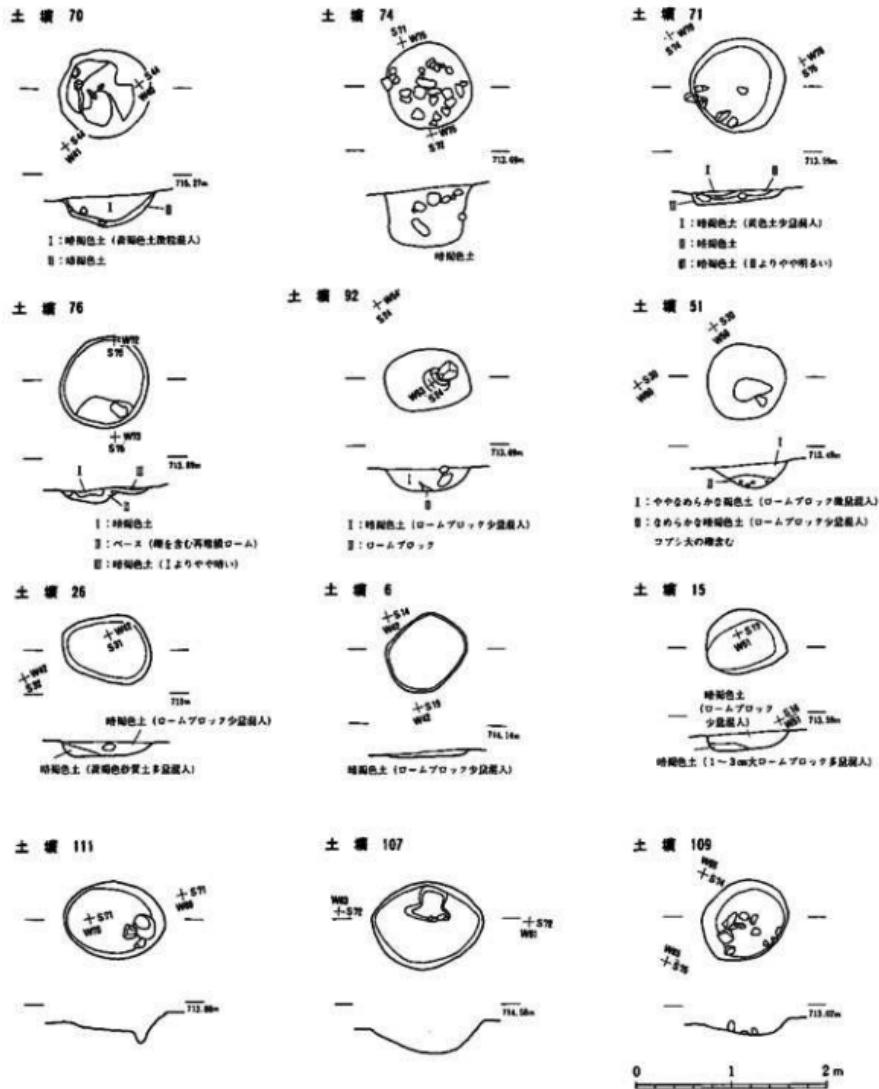


0 1 2 m

第11図 土 壤 (3)

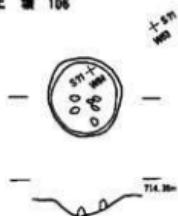


第12図 土 壤 (4)

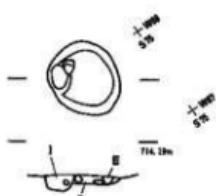


第13回 土 壤 (5)

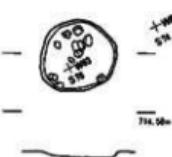
土 塚 106



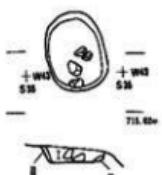
土 塚 78



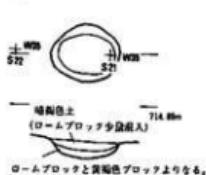
土 塚 108



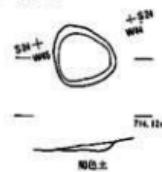
土 塚 40



土 塚 81

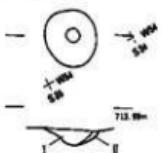


土 塚 34



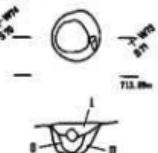
I : 暗褐色土 (ロームブロック混入)  
II : 暗褐色土 (やや明るい)  
III : 時間色土

土 塚 91



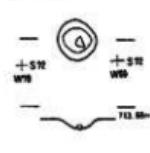
I : 暗褐色土 (ロームブロック少混合)  
II : 暗褐色土 (ロームブロック多混合)

土 塚 75



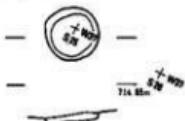
I : 暗褐色土  
II : 暗褐色土 (ロームブロック少混合)  
III : 暗褐色土 (よりやや明るい)

土 塚 110



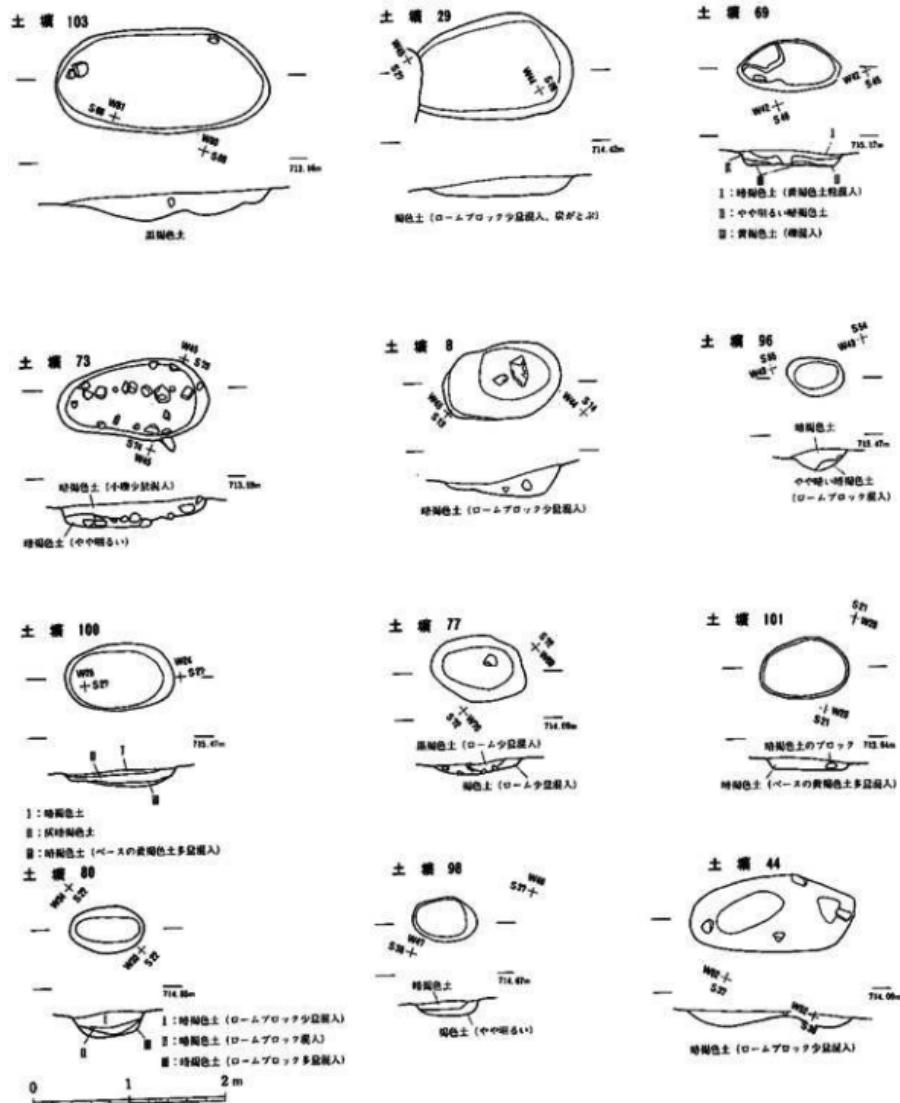
0 1 2 m

土 塚 84



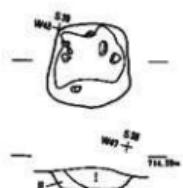
時間色土 (ロームブロック混入)

第14図 土 塚 (6)



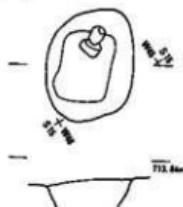
第15図 土 壤 (7)

土壌 43



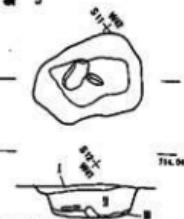
I: 時間色土  
II: 黄褐色土 (腐りやすい)

土壌 9



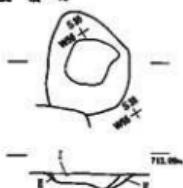
時間色土 (ロームブロック混入)

土壌 5



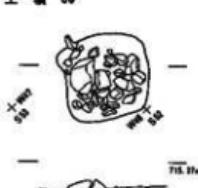
I: 時間色土  
II: 時間色土 (ロームブロックを含めて多量に混入)  
III: 黄褐色土 (ロームブロック多量混入)

土壌 49



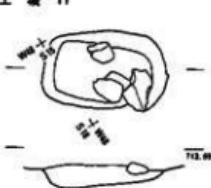
I: 時間色土 (ロームブロック少量混入)  
II: 時間色土 (ロームブロック多量混入)

土壌 66



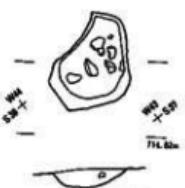
時間色土 (しまり悪い)

土壌 11



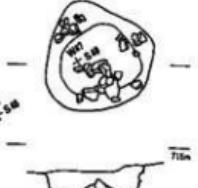
時間色土 (ロームブロック多量混入)

土壌 41



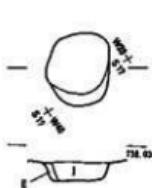
褐色土 (小耕混入)  
表面にコブン大の塊状部あり

土壌 68



時間色土

土壌 4



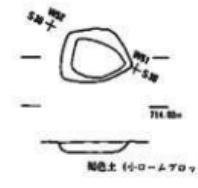
I: 時間色土 (ロームブロック少量混入)  
II: 黄褐色土 (砂粒あり)

土壌 86



I: 黄褐色土 (ロームブロック少量混入)  
II: 黄褐色土 (褐色土少量混入)

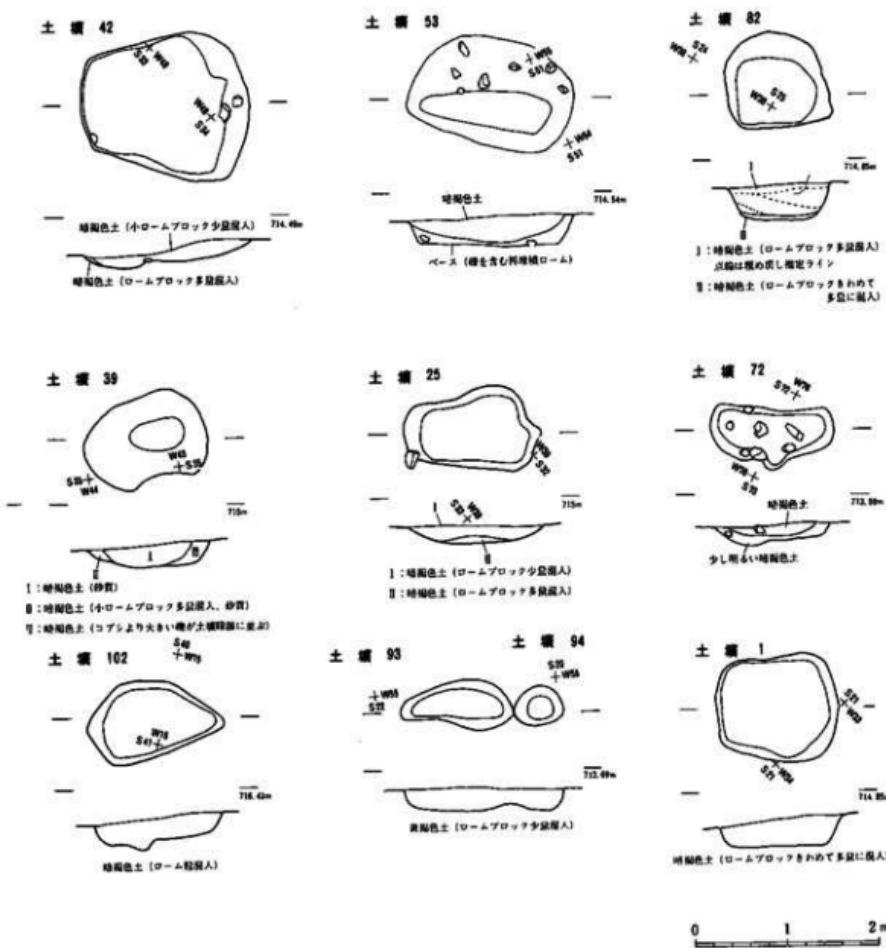
土壌 89



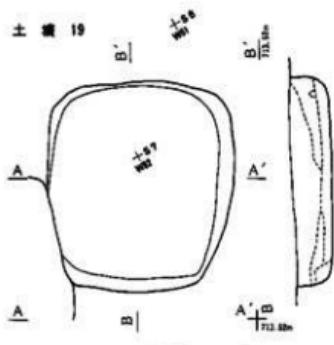
時間色土 (小ロームブロック少量混入)

0 1 2 m

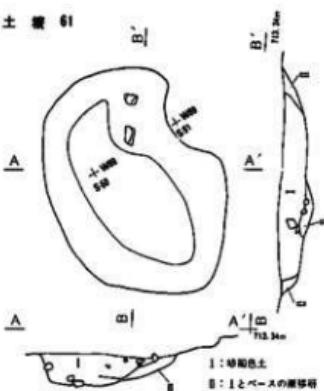
第16図 土 壤 (8)



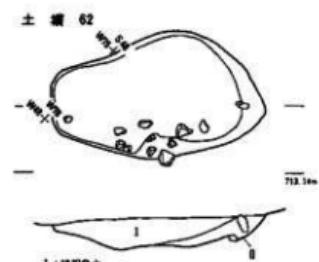
### 第17回 土 壤 (9)



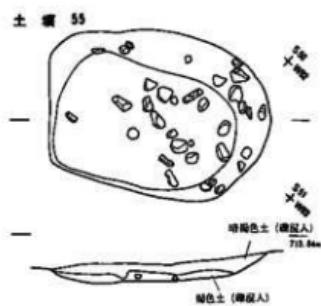
土壤 19  
A-A'  
B-B'  
Bt 5cm  
A 10cm  
B 10cm  
I : 暗褐色土 (0.0~4cm 大のロームブロック多量混入)  
II : 地盤は埋め戻し層を示すライン



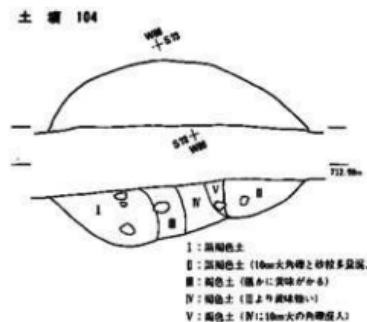
I : 暗褐色土  
II : I とベースの断面図



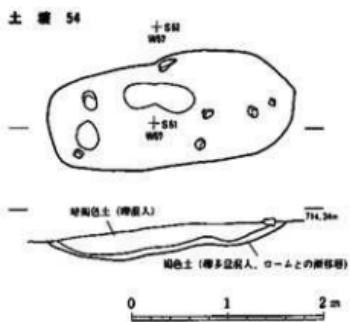
I : 暗褐色土  
II : 灰色土 (磧多量混入)



I : 暗褐色土 (磧混入)  
II : 灰色土 (磧混入)

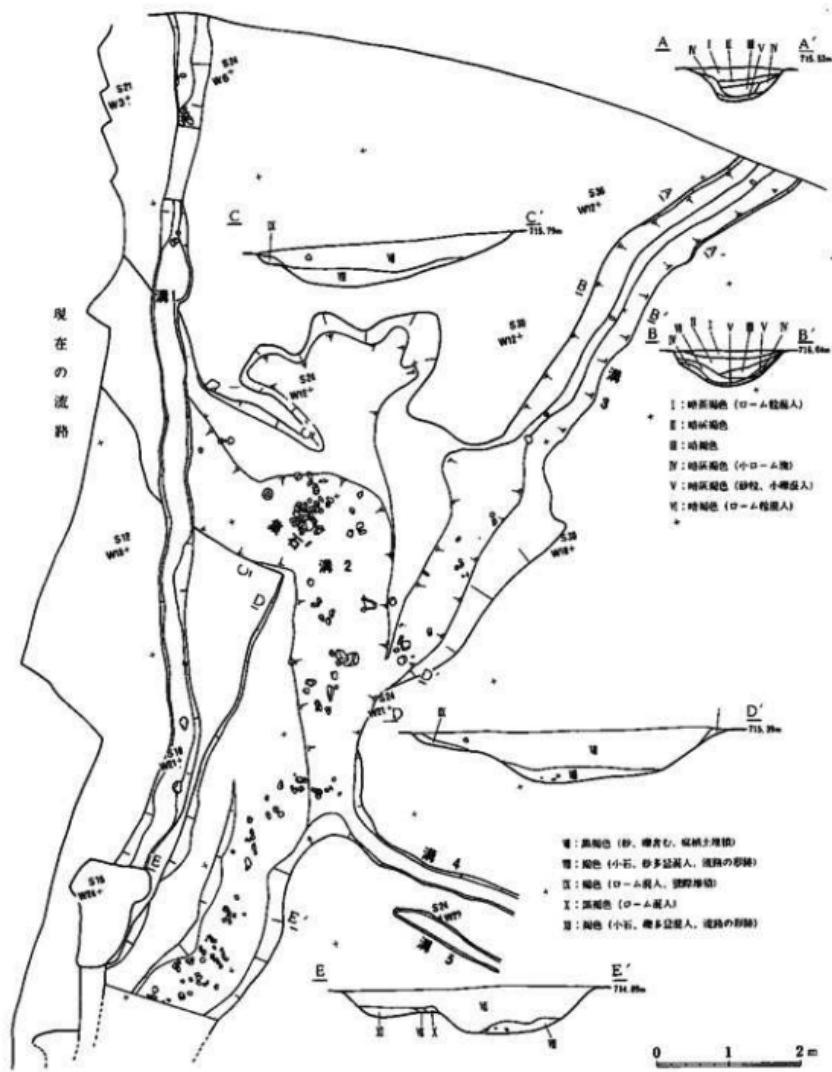


I : 暗褐色土  
II : 深暗褐色土 (10cm 大内側と砂粒多量混入)  
III : 灰色土 (礫かに実块がかる)  
IV : 灰色土 (IVより更に物多い)  
V : 灰色土 (V に10cm 大の内側混入)



I : 暗褐色土 (磧混入)  
II : 灰色土 (磧多量混入、ロームとの接続層)

第18図 土 墓 00



第19図 渓

### 第3節 遺 物

#### 1. 土器

##### (1) 縄文時代の土器

本遺跡からは、縄文時代前期前半後葉（黒浜式期一第Ⅰ群とする）、前期後半前葉～中葉（諸磯a～b式期一第Ⅱ群とし、この地では主体的ではない東海・関西系の北白川下層式の土器については第Ⅲ群とした）、中期末（曾利V式期・松本平縄文時代中期後期一第Ⅳ群とする）の土器群が検出された。

第Ⅰ群は少量であり、住居跡覆土内及び遺構外包含層からの出土である。第Ⅱ、Ⅲ群は、住居跡2軒、土壤、遺構外包含層の出土と本遺跡での中心をなす。第Ⅳ群は少數の土壤と住居跡覆土上層、遺構外包含層からさほど多量ではないが出土した。これら土器群は、そのほとんどが破片資料であり、完形品、ほぼ完形品となるものは極々少數で、図化したものも破片からの復元がほとんどである。これらを主体的な文様で分類すると次のようになる。

##### 第Ⅰ群 前期前半黒浜式期の土器

###### 1. 縄文を施文するもの

- a. 織維を含むもの
- b. 織維を含まないもの

###### 2. 竹管文（半截竹管を使用）を施文するもの（織維を含む）

##### 第Ⅱ群 前期後半諸磯a・b式期の土器

###### 1. 半截竹管、円形竹管を使用し竹管文を施文するもの

- a. 横位に平行沈線文、幅狭な連続爪形文（刺突文・有節平行沈線文）を施すもの（爪形文のみの場合もある）

- b. aと同様であるが、爪形文が幅広であるもの（爪形文のみの場合もある）

- c. aと同様で平行沈線文のみの施文のもの（縦位が組む場合もある）

- d. aと同様手法であるが、弧線等により、三角形や木の葉文等の複雑な区画文を施すもの

- e. bと同様手法で、dの文様を施すもの

- f. cと同様手法で、dの文様を施すもの

- g. bと同様手法で、浮線文等が組み合わさり、渦巻文等の曲線モチーフが施されるもの

- h. 円形竹管を刺突し円文を施すもの（竹管を用いて刺突し、その中の剖いたものを含む）

- i. 縦位に平行沈線文、円形竹管文等を施し、それを平行沈線文等の直線、弧線文等で結び、肋骨文等のモチーフを施文するもの

- j. 平行沈線文が小波状に施文されるもの

- k. その他

2. ヘラ状工具で施文するもの
  - a. 横位、縦位の沈線文
  - b. 刺突するもの（刺突文、押し引き沈線）
  - c. 深い沈線で、弧線等により、三角形や木の葉文等の複雑な区画文を施すもの。
  - d. c に、竹管文の爪形文が組み合わさるもの
3. 棒状工具で施文するもの
  - a. 横位、縦位の沈線文
  - b. 刺突するもの（刺突文、押し引き沈線）
4. 棒状工具で施文するもの
  - a. 横位、縦位の平行線文で、波状文が組み合わさるもの
  - b. 竹管文が組み合わさり、肋骨文等のモチーフを施文するもの
5. 粘土紐を貼付した浮線文・陸線を施すもの
  - a. 口縁部に主に施され、横位に貼付し、浮線上に半截竹管をかぶせて刺突したもの
  - b. 浮線上にヘラ状工具、棒状工具による刻みが連続して施されるもの（主に斜位のものが多い）
  - c. 浮線上に繩文を転がすもの
  - d. b と同様手法で、横位の浮線間を結び、梯子状のモチーフが施されるもの
  - e. b と同様手法で、渦巻文等の曲線的なモチーフが施されるもの
  - f. c と同様手法で、f と同様なモチーフが施されるもの
  - g. 浮線上を押捺するもの
  - h. 浮線上に施文が見られないもの
6. 横位の無文帯が見られるもの（無文帯の上下には、竹管文、繩文等が施される）
7. 繩文のみのもの（諸磯 a・b 式期に分けられないものが多い。特に胴部破片）
  - a. 繩文のみ、口縁端部では何の施文も見られないもの
  - b. 口縁端部に刻みがあるもの
  - c. 口縁端部に刺突文が見られるもの
  - d. 口縁端部に刻みがあるもの
8. 無文のもの（浅鉢が多い）

以上、II群を諸磯 a・b 式期に分けてみると、諸磯 a 式期は、1a・c～f・h～j, 2a・b, 3a・b, 4a・b, 5a・c・k, 6, 7a～d, 8 で構成され、諸磯 b 式期は、1a～c, e～g, 2a・c・d, 3a・b, 5b～k, 7a～d, 8 で構成されていると考えられる。

第III群 東海、関西系土器群

  1. 半截竹管、貝殻腹縁で施文するもの（連続爪形文で貝殻腹縁で施すものもあるので同一分類

とした。)

- a . 幅広な連続爪形文が施されるもの（北白川下層Ⅱa式併行の土器）
  - b . 幅狭な連続爪形文が施されるもの（平行沈線が伴う場合もある。北白川下層Ⅱb式併行の土器）
  - c . bと同様手法であるが、弧線等により、三角形や木の葉文等の文様を施すもの（浅鉢に多い。）
  - d . 平行沈線のもの
  - e . 幅狭な連続爪形文であるが、bとは異なり、bより幅狭で鋭い刺突文で、凸帯を伴うこと也有る（北白川Ⅱa, b式併行の東海系土器であろう。）
2. 粘土紐貼付等の凸帯文が施されるもの
- a . 微隆起線的な低い凸帯文で凸帯上に幅狭な連続爪形文が施される（北白川Ⅱb・c式併行の土器）
  - b . 凸帯文上をヘラで切るもの（斜位に切るものが多い。北白川Ⅱc式併行の土器）
  - c . bと同様手法で、直線・曲線を合わせモチーフを施すもの（北白川Ⅱc式併行の土器）
  - d . bと同様手法で、横位の凸帯文間を結び、梯子状のモチーフを施すもの（北白川Ⅱc式併行の土器）
3. 繩文を施文するもの（単独の施文と、1～3の施文に伴い胴部文様帶となるものも含んでいる。0段多条の繩文が多く、羽状となるものが多い。）
4. 細かい調整痕もしくは、擦痕をもつ土器
5. 無文の土器

#### 第IV群 中期末の土器

1. 棒状工具・竹管の背による施文
- a . 沈線で「ハ」の字の綾杉状に施文されるもの（曾利式系及び唐草文系の土器）
  - b . aの文様で、沈線（多くはU字、逆U字等の区画文である）を伴うもの（曾利式系、唐草文系の土器）
  - c . aの文様で、隆帯（多くはdと同様の区画文）を伴うもの（唐草文系の土器）
  - d . 「の」の字状に抉るように施文されるもの（口縁部下の区画文上部にいくつか並んで施文される。唐草文系の土器）
  - e . 横位、縦位沈線文の施文されるもの
2. 繩文を施文したもの
- a . 沈線（多くはU字、逆U字等の区画文である）を伴うもの（加曾利EⅣ式系の土器）
  - b . 隆帯（多くはaと同様の区画文）を伴うもの（加曾利E式系の土器）
  - c . 繩文のみの土器

d. 縦位の結節縄文を伴う土器（下伊那系の土器）

3. 基本的には無文であるが、一部に二条の縁帶を伴い、2ヶないし4ヶの把手が付けられる。

4. 無文土器

以下、遺構別・時期別に概述する。（第22～47図）

1. 1号住居跡（1～5、24～48、563）

本跡からは第Ⅰ・Ⅲ群のみが出土している。1～5は、5が諸磯a式以外は、諸磯b式の土器である。

第Ⅱ群1（1・2・5・24・26～36） 2・26・27はa、35はb、1はc、5・28・29はbで、28・29は同一個体でありh文様と組み合っている。31～33はeで31・33は浅鉢口縁部、32は深鉢口縁部である。30・36はf、34はgに分類される。

1は、口縁部が緩やかに開き、胴下半部がやや脹らむ器形で口縁部に5d文様が組み合い、胴部は単節RLの繩を横位回転している。おそらくここに施された竹管文のモチーフはi文様が変化したものであろう。2は口縁部に向って開く器形で三条の平行沈線+爪形が二段ありその間を「風」の文様で埋めている。胴部は単節RLの繩を横位回転している。5は浅鉢で竹管文内の繩文はRLの磨り消し縄文で、下半部の縄文もRLである。

第Ⅱ群5（3・37） 3はcの深鉢胴下半部で単節RLの繩を横位回転しており、結節縄文もみられる。37はdで波状となる深鉢の口縁部である。

第Ⅱ群7（38～47） すべてaに属するもので深鉢であり、41は底部、これ以外は胴部である。43・47以外すべて単節LRで、47は単節LRである。43は正反の合の崩れた縄文と思われる。

第Ⅲ群1（563） aに属する浅鉢片で、丹彩され、内面には文様が描かれている。

第Ⅲ群3（48） 深鉢胴部片で、単節RL、LRを交互に転がしている。

2. 2号住居跡（6～13、49～201、564）

本跡からは、覆土中～下層、床面で第Ⅱ・Ⅲ群、覆土上～中層及び検出面から第Ⅰ～Ⅳ群の土器が出土している。6～13は、6～9が諸磯a式期、12・13が諸磯b式期、11は関西系の底部である。10については諸磯a・bどちらであるか判断が難しい。

第Ⅰ群1（49～53） すべて深鉢片でaに属し、単節RL・LRを使用している。9は口縁部である。

第Ⅰ群2（50） C字の爪形文と平行沈線上下に組み合わせた深鉢片である。

第Ⅱ群1（6～9、55～59、64～84、87、88～119、122、132） 7、66～83はaで、66～70、73、75は黒浜式の爪形文を残している。108～110、122はb、9、64、65、92、93、95、96～100はc（64、65は同一個体）103はd、115、116はe、101、102、104、105、114、118、132はf、107、111、112はg、55～59はh（57～59は同一個体）6、84、88～91、94はi、87はjに属する。80、81、103、132が浅鉢以外すべて深鉢である。

6は胴部がやや脹らみ、口縁が開き、口縁端部が丸く内傾する深鉢で、口縁端部には、竹管の背による押捺が見られ、口縁直上と頸部には爪形文が、胴部には単節RLの繩文が施される。9はラッパ状に口縁が聞く深鉢で、平行沈線は口縁直下にのみ施文され、他はすべて単節RLの繩文である。

第Ⅱ群4 (85, 86) 85は深鉢口縁部でa, 86はbである。86には5aの文様が組み合わさっている。

第Ⅱ群5 (12, 13, 60~63, 106, 117, 120, 121, 123~130) 60~63はa, 106, 123, 126, 128はb, 13, 125, 127はc, 12, 120, 121はd, 117はe, 113, 129はf, 132はgである。

12は底部から口縁部に向って開き、頸部に脹らみをもち、口縁部が内湾する深鉢で、4単位の波状口縁で、口縁端部は棒状工具による刻みがみられる。地文は単節RLの繩文である。13は12と同様な器形であると考えられるもので、口縁に同様の刻みをもち、三条の浮線文下には竹管文が見られる。繩文は単節RLである。

第Ⅱ群6 (7) 単節RLの繩文と1aの文様が無文帶をはさんで両側にみられる。

第Ⅱ群7 (10, 54, 133~177) 54を除きすべてaであり、すべて単節RL・LRの繩文であり、141, 145, 148, 167~169には結節繩文が見られる。54はcである。すべて深鉢片で、54, 133~137は口縁部である。54は諸磯a式期に属するもので、他の口縁部片も口縁形態から同様の時期と考えられる。

第Ⅱ群8 図示しなかったが、この多くは浅鉢片である。

第Ⅲ群1 (178~188) 178~187がa, 188がcに属する。178, 179は同一個体で口縁端部内面角にヘラ状工具によるきざみが見られ、胎土も灰色であり、直に移入したもの可能性がある。また180~187も同様な胎土であり、中には同一個体のものも含んでいると思われる。

第Ⅲ群2 (189, 564) 563は浅鉢口縁部でcに属し、丹彩され、内面には丹で文様が描かれている。189はeに属し、単節RL・LRの繩文が施される。e文様は土壤、包含層内にも他に見られるが、本場関西方面ではあまり見られず、飛驒または東海方面の土器と考えられる。

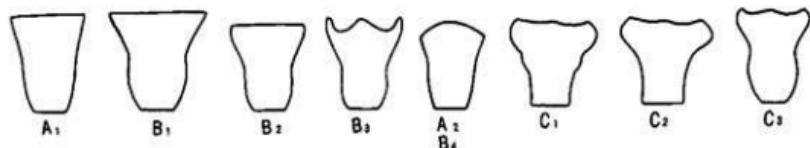
第Ⅲ群3 (190~196) 190, 192は深鉢口縁部、192は底部、他は胴部片である。すべて単節RL・LRであり、結束しているものは見られない。190はただ薄いというだけで繩文原体も異なり、こちらの土器とも思える。

第Ⅲ群4 (197), 第Ⅳ群5 (11, 198, 199) 他に覆土上層に第Ⅳ群a (201) がある。

2号住居跡壁外西側出土の土器 (14)

4単位の波状口縁の土器で、4単位の波頂部に穿孔が見られる第Ⅱ群深鉢で、底部近くの穿孔は補修孔である。文様は1iで、口縁端部下、口縁中間部、頸部に細長い半截竹管による刺突文が見られ、胴部は単節RL・LRをそれぞれ分けて転がしている。この土器の形態、文様は黒浜期の様相を残すもので、諸磯a式期でも古いものと考えられる。

### 3. 土壌出土の土器 (15~18, 20, 201~255)



第20図 第II群土器器形模式図

代表的なものをあげると、土壤58の15が第II群1「の深鉢、土壤59の16が第II群1の深鉢、17が第II群7aの深鉢（17は口縁～胴上半はヘラケズリのみで何も施文されず、胴下半にわずかに繩文が施されるのみである）、土壤78の18が第II群8の浅鉢底部、土壤68の20が第IV群4の深鉢（おそらくこの形態は有孔鉢付土器の変化形態と考えられる）である。特に土壤59の土器群は出土位置の上下差はあるが、一括として捉えて良いものであろう。土壤74の235、土壤110の253と土壤111の255は北白川下層式をまねて作ったものと考えられる。

簡単に土壤出土の破片を見ておくと、208、211、212～216、220、221、223～228、235、238、241、242、251は第II群1、222、229、242、243、253～255は第II群5、207、209、210、217、230～234、239、240、244、245、248、250、252は第II群7、218、564は第III群2、236、237、246、247、248が第IV群1、219が第IV群2に属する。

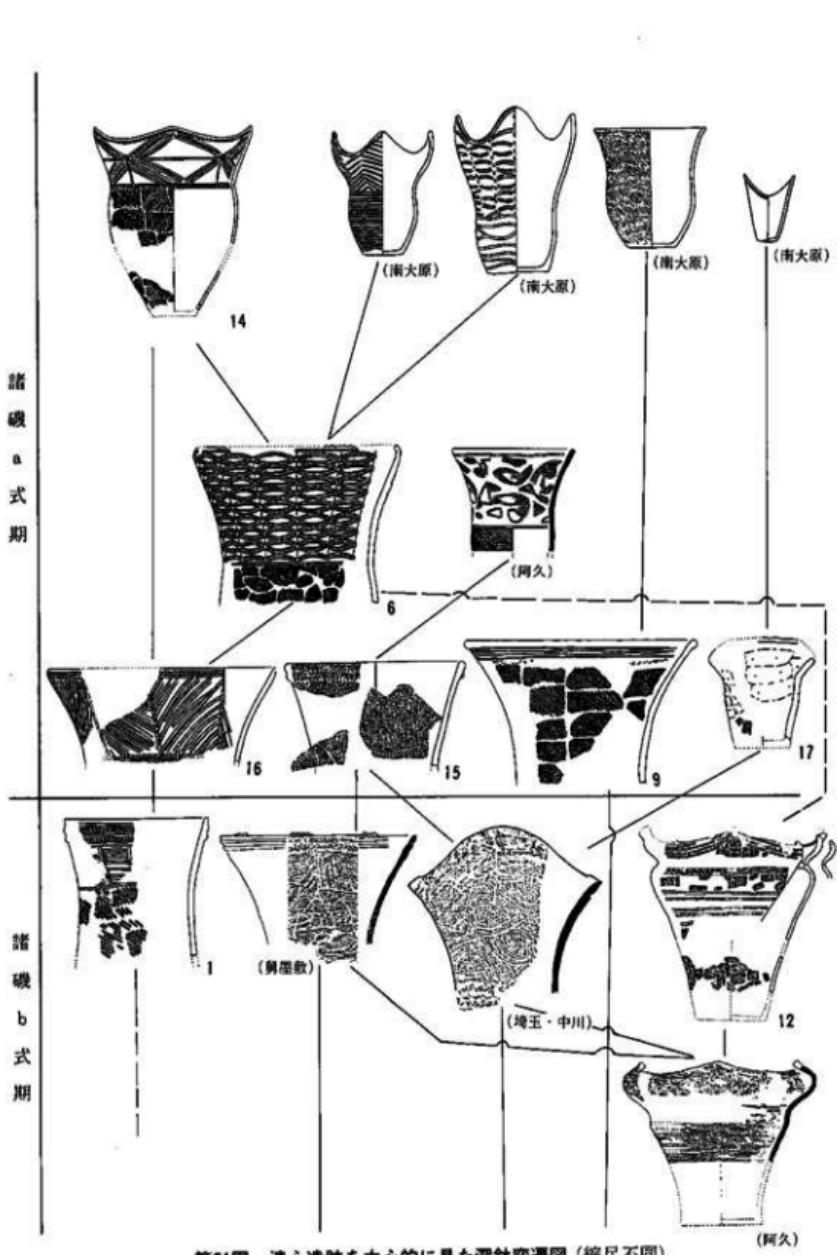
#### 4. 遺構外包含層出土の土器 (19、256～562)

簡単に出土土器の破片を見ておくのみにとどめる。258、260、262は第I群1a、263、264は第I群1b、256、257、259、261は第I群2、269～282、290～376は第II群1（269～282、290～338は諸磯a式期、339～376は諸磯b式期）、403～406は第II群2（すべて諸磯b式期の浅鉢）、283～289は第II群4、370、378～402、407は第II群5、265～268、377、410～525は第II群7（265～268は諸磯a式期、377は諸磯b式期）、410～411も諸磯a式期と考えられる）、528、529は第III群1a、530は第III群1b、526、527は第III群1e、535は第III群2b、536は第III群2c、531は第III群2a、537、538は第III群2d、532～534は第III群3、539～556は第IV群1、557～562は第IV群2、544は第IV群4に属する。

#### 5. まとめ

本遺跡から主的に出土したのは、第II群（諸磯a・b式期）の土器である。その中でも浅鉢はきほどに多くはなかったが、深鉢については豊富な資料である。本遺跡の多くは破片資料が多かったが、器形を復元し大別するとA、B、Cと器形で大別され、口縁内溝度、口縁外傾度、平口縁か波状口縁かで分類される（第20図）。

A. 底部から口縁部へ向って緩やかに開くもの。1は平口縁、2は大きな2単位の波状口縁。



第21図 滅心造跡を中心的に見た深鉢変遷図(縮尺不同)

B. 胸部に脛らみをもって、頸部でくびれるもの。1は口縁部が直線的に開くか、やや内湾ぎみのもの。2は内湾するもの。3は内湾し、4単位の波状口縁となるもの。4はA2に近似するが、頸部がややくびれるもの。

C. いわゆるキャリバー形の土器で、口縁部が頸部に対して短く、内湾するもので、1は頸部に1段の脛らみをもつもの、2は頸部でくびれるのみのもの、3は胸部にやや脛らみをもつもの。この種の深鉢は平口縁となるものは少なく、ほとんど波状口縁である。

これら器形を諸磯a, b式期の時間差で見るならば、A器形はa, b両式期に渡り見られ、Bは1, 4が両時期に渡って見られ、2, 3はほとんどa式期でしか見られず、その反面C器形はb式期に出現し多くなる器形で、波状口縁のものが多い。このことは単純に考えるならば、B2, 3がCに変化したとも考えられるが、しかし形態的には異なる点が多く、土器自体の使用方法の違いと考えられる。A器形には1, 2の2器形をあげたのみであるが、中には4単位の波状口縁となるものも見られる。

文様から見ると肋骨文はだんだんと直線的になるものと考えられ、木の葉文は渦巻文などが加わり、より複雑化するものと考えられる。また連続爪形文の1gは浮線文5eのモチーフと近似し、爪形文が浮線文に与えた影響は大きかったと考えられ、浮線文の初現的姿は、12の土器のような単純な横位が主体で、部分的に縦位に貼付され、梯子状のモチーフが見られるものと考えたい。そこに1g文様の要素が加わり、5eが生まれたものであろう。

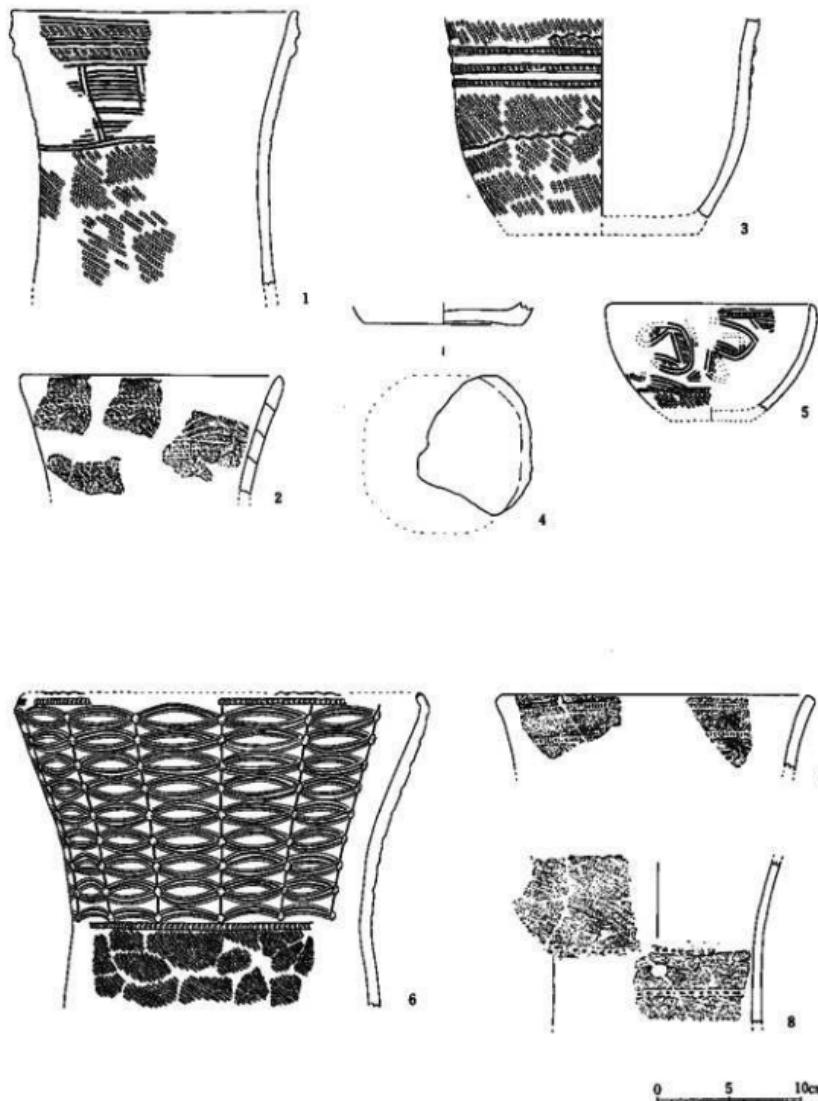
前述した文様分類、器形分類等を統合すると第21図のような土器変遷図が考えられる。しかしこの変遷図は、ただ単純に器形、文様を比べ並べたもので、不備な点が多いものである。不備な点について今後の課題として追求していきたい。

#### 参考文献（変遷図に引用資料の文献を含む）

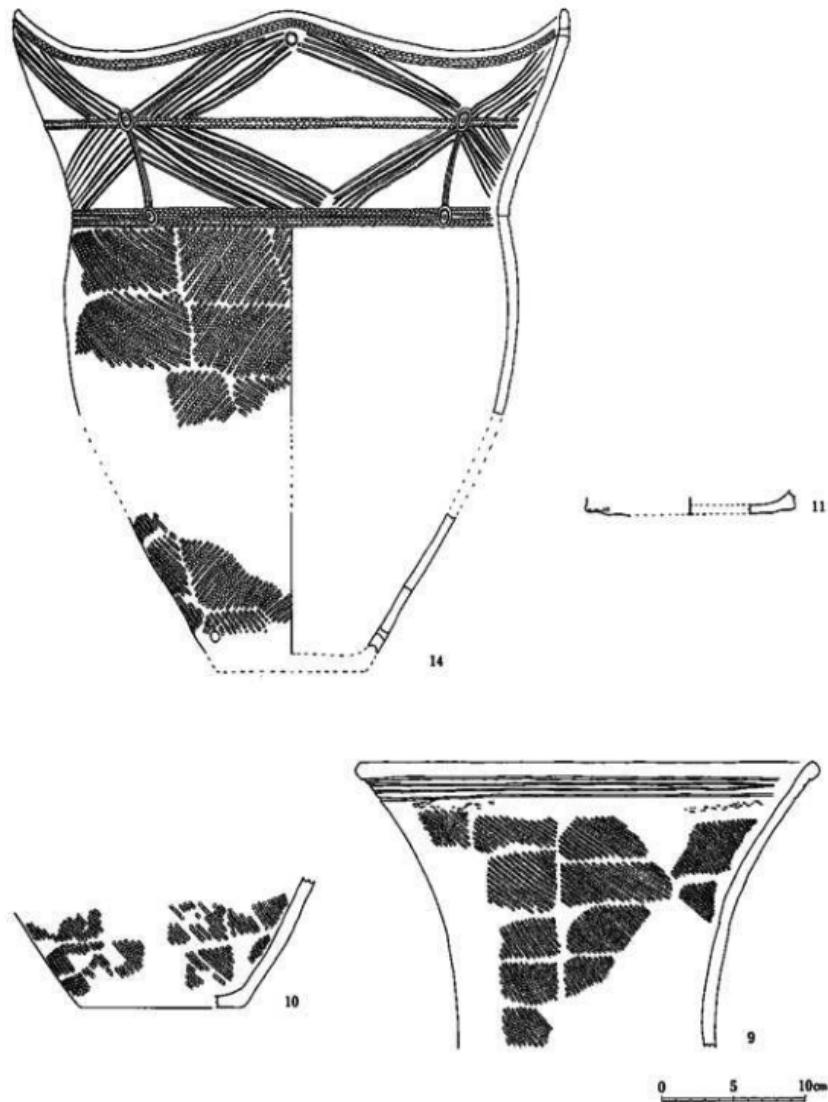
- 大畠哲郎他「上原」長野県教育委員会 1957年  
大畠哲郎他「信濃史料」1号 信濃史料刊行会 1954年  
金井正三「高文前期の特殊浅鉢について」信濃31号4号 1979年  
藤口昇一他「長野県中央古墳報告書一深井の4号」長野県教育委員会 1976年  
鈴木敏昭他「説明6 武士谷の構造とその変遷」土壤考古2号 1960年  
山根弘人他「御所遺跡」山梨大学考古学研究会 1982年  
黒沢浩他「長野県中央古墳報告書一深井の5号」長野県史刊行会 1983年  
金井正三他「長野県史一北京郷一」長野県史刊行会 1982年  
今村信重、綿谷克彦他「純文化の研究3」椎山龍治編 1982年

#### (2) その他の土器

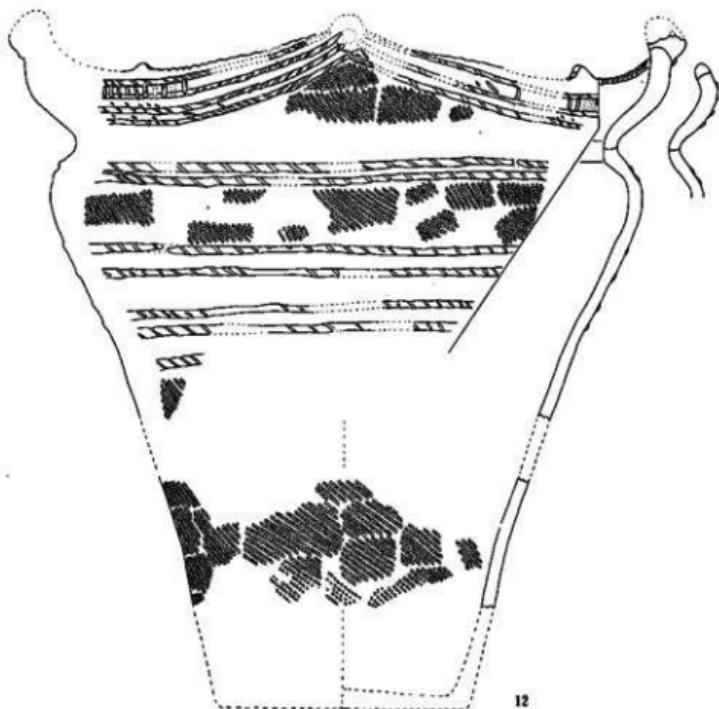
溝2の覆土中より東海系陶器の捏鉢が、また第2号住居址の覆土上面から陶磁器が出土している。捏鉢は13Cの後半から14Cのものとみられる。



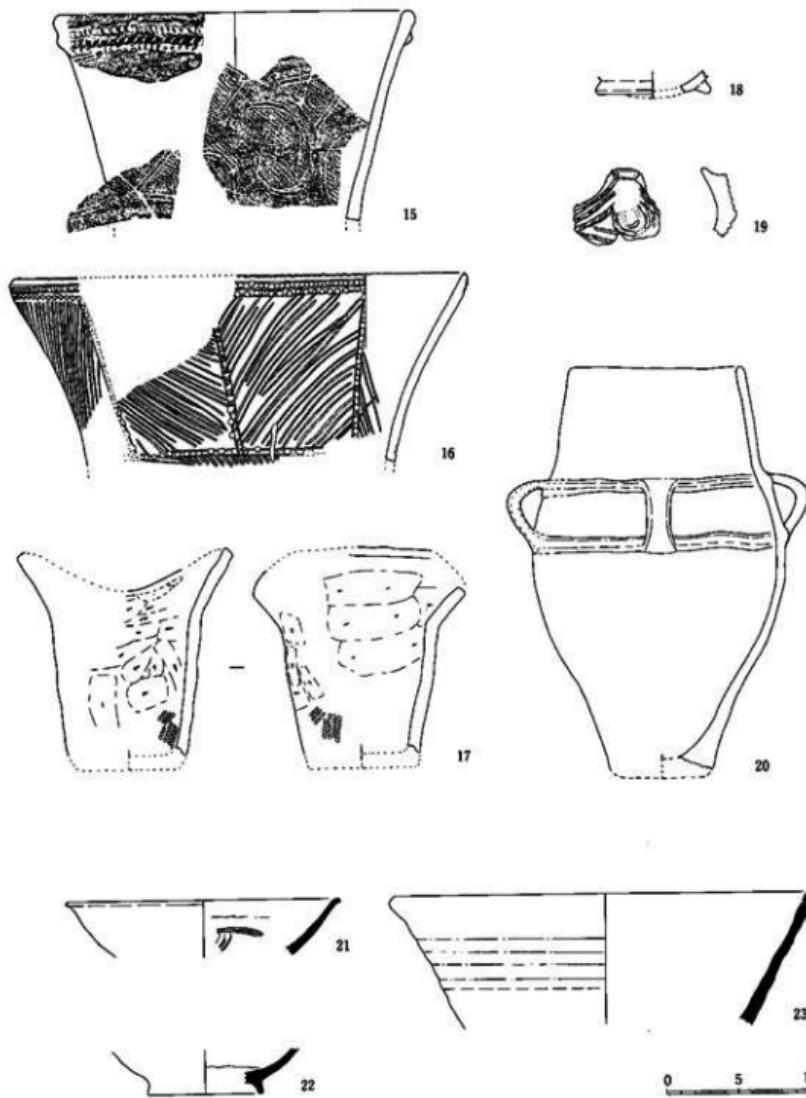
第22図 繪文土器実測図 (1)



第23図 桶文土器実測図 (2)

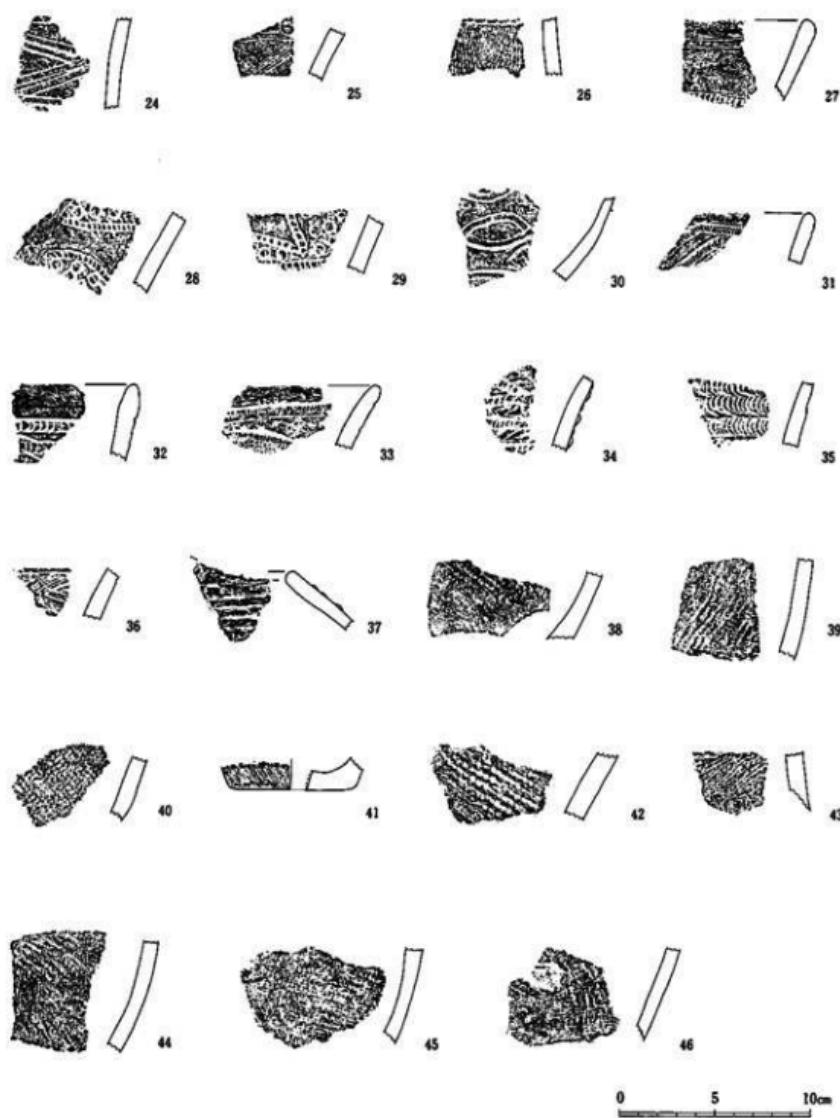


第24図 繩文土器実測図 (3)

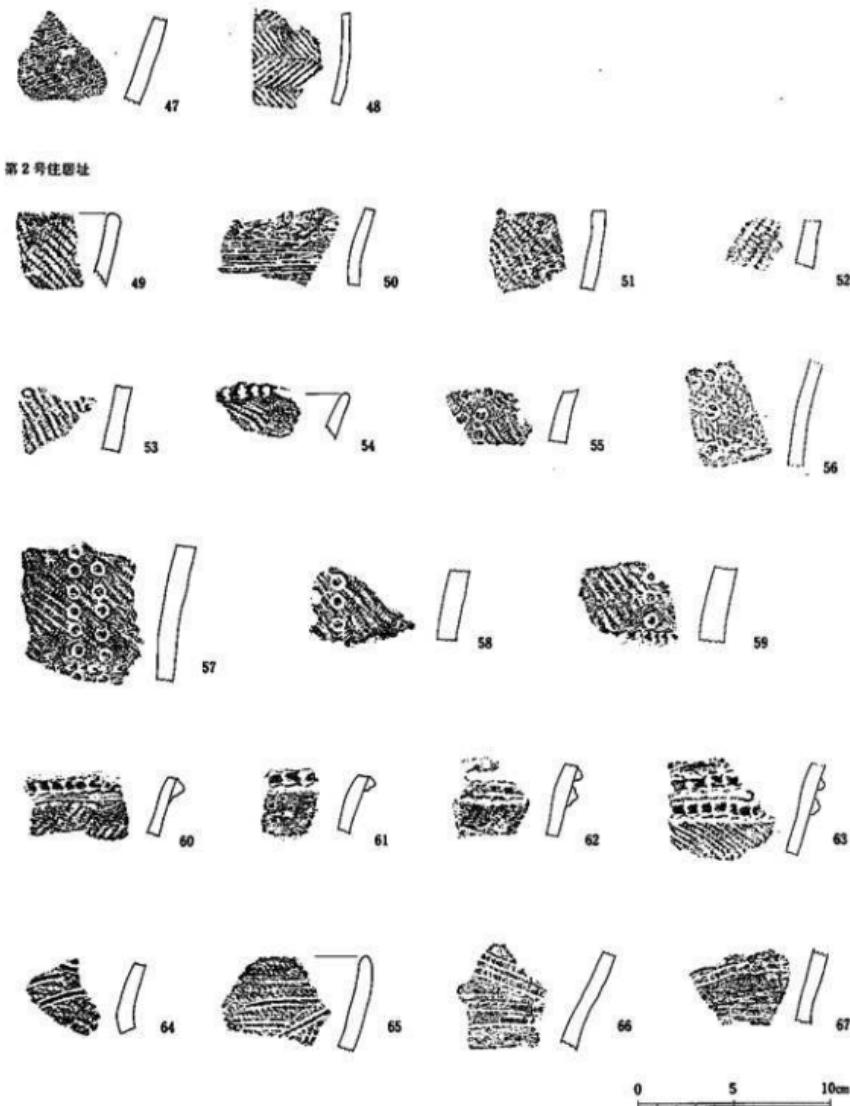


第25図 繪文土器実測図(4)・中世陶器実測図

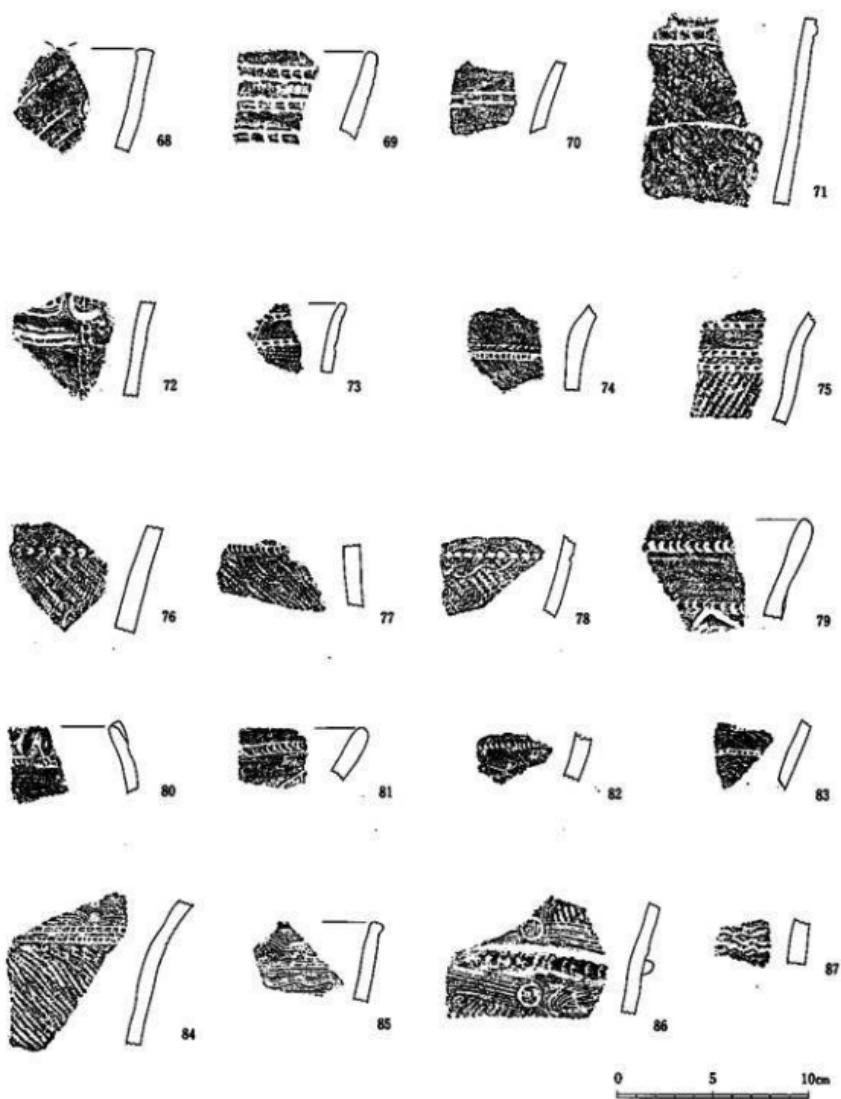
第1 号住居址



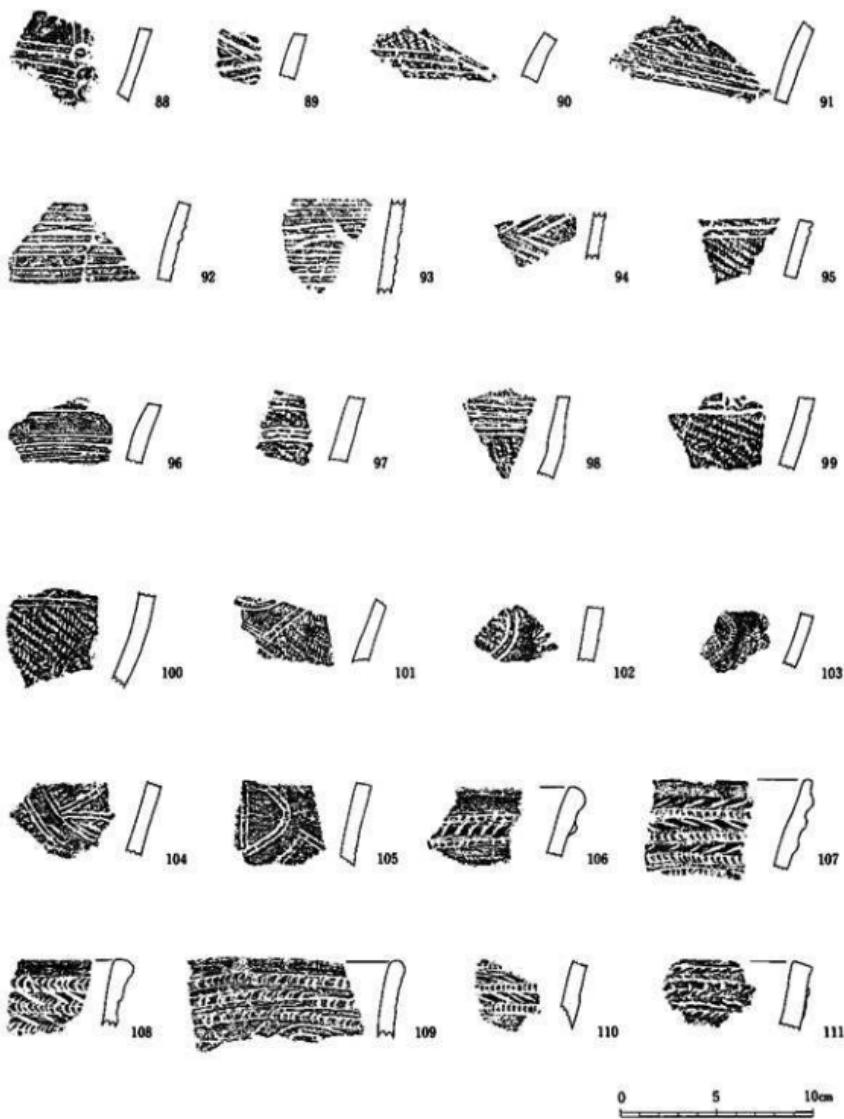
第26図 縄文土器拓影 (1)



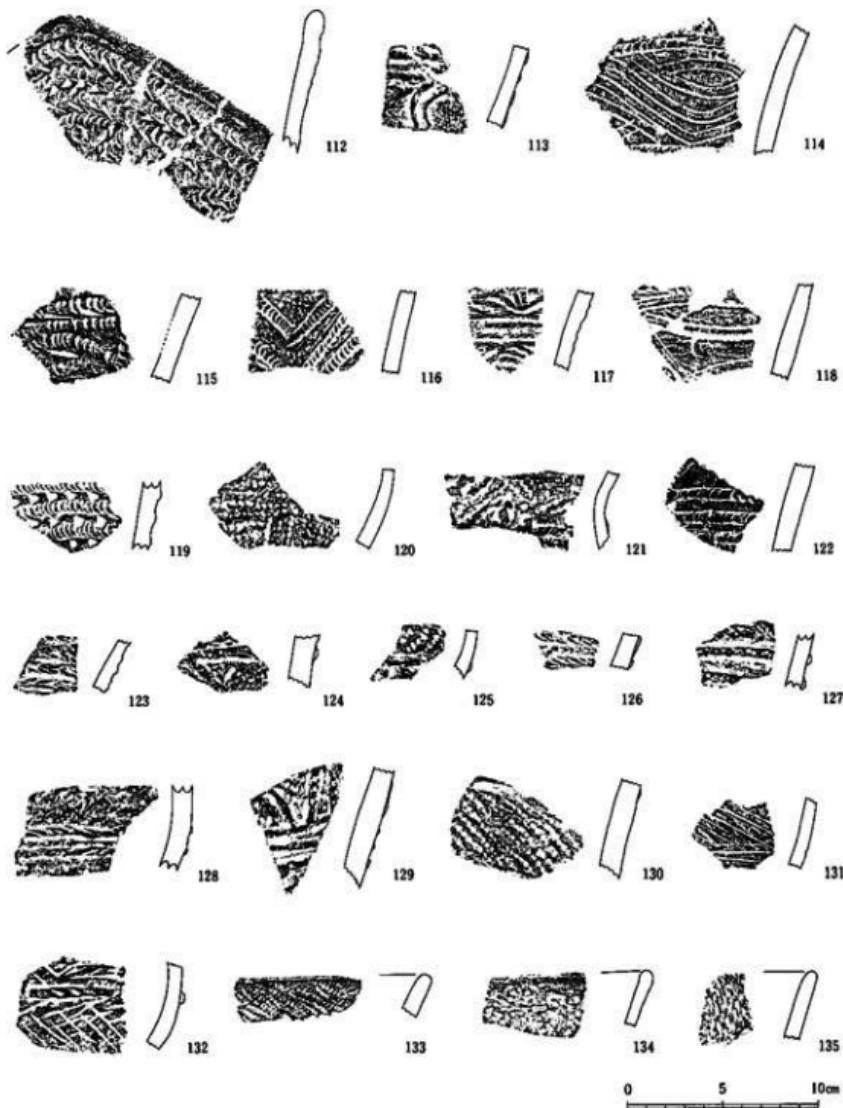
第27図 繩文土器拓影 (2)



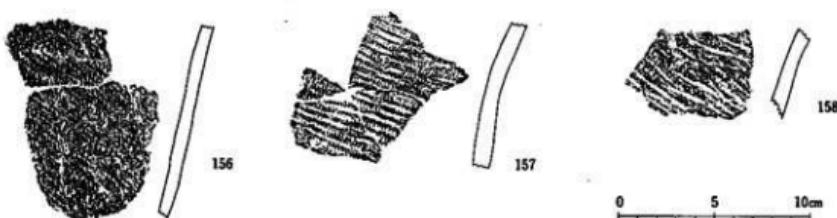
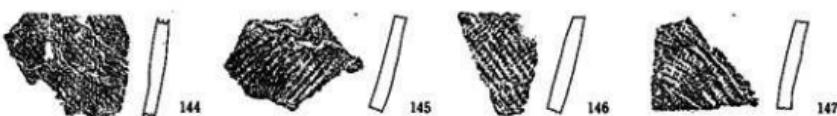
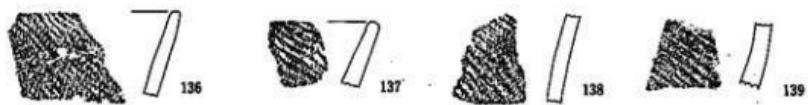
第28図 繩文土器拓影 (3)



第29図 繪文土器拓影 (4)

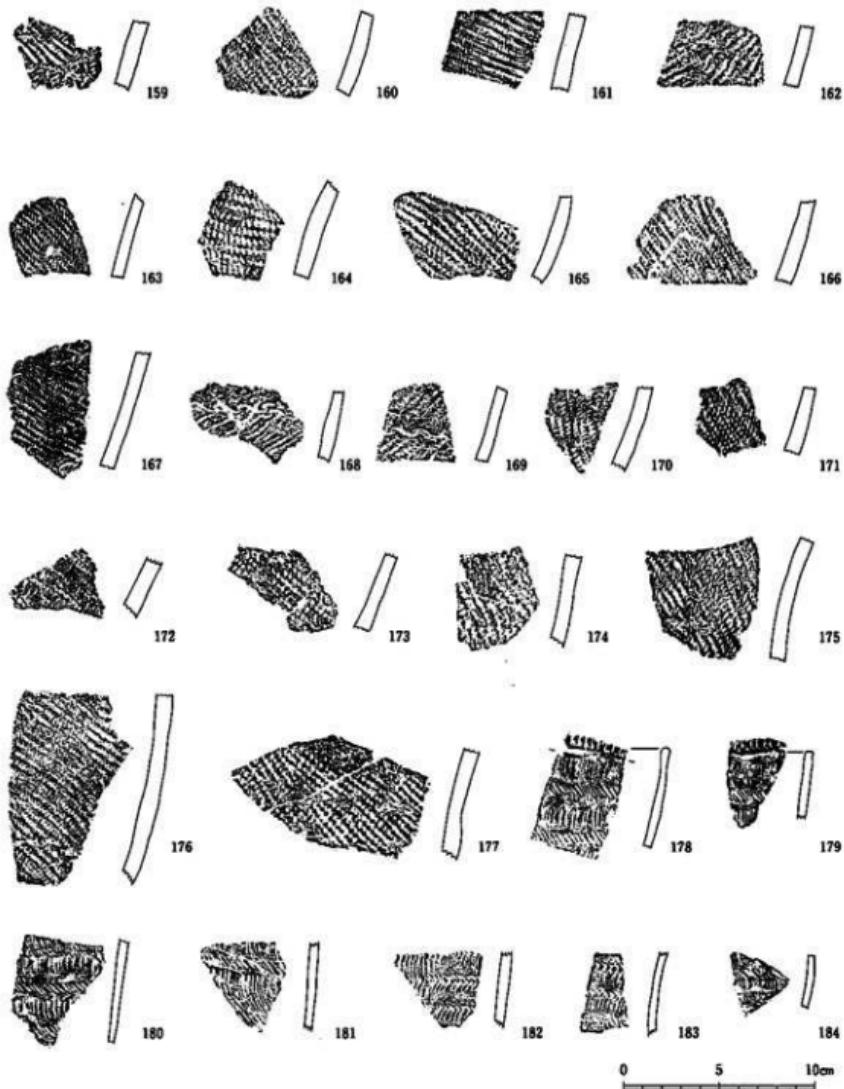


第30図 繩文土器拓影 (5)

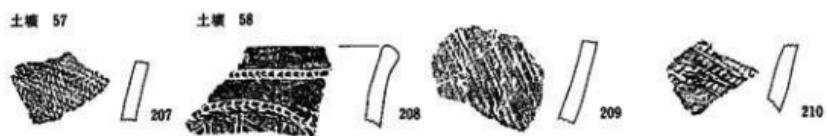
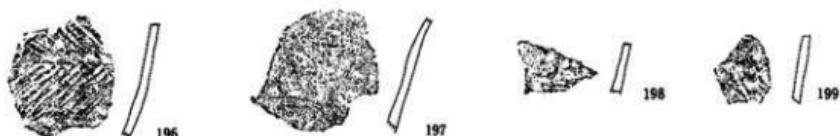


0 5 10cm

第31図 繪文土器拓影 (6)



第32図 繪文土器拓影 (7)



0 5 10cm

第33図 繩文土器拓影 (8)

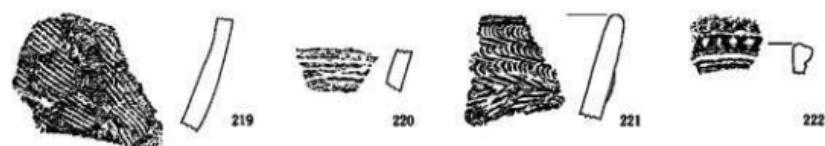
土壤 59



土壤 61

土壤 62

土壤 73



土壤 74

227



228

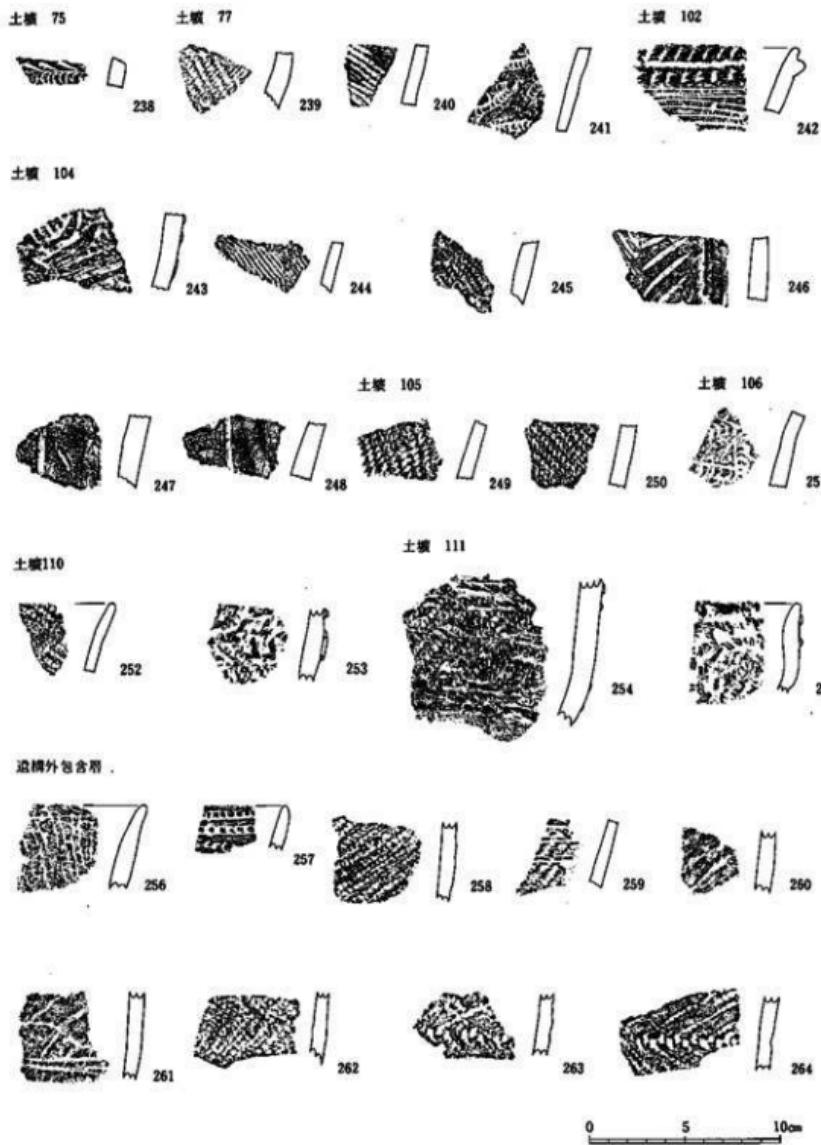


233



0 5 10cm

第34図 漢文土器拓影 (9)

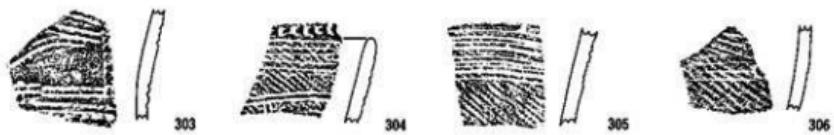


第35図 繩文土器拓影 (10)



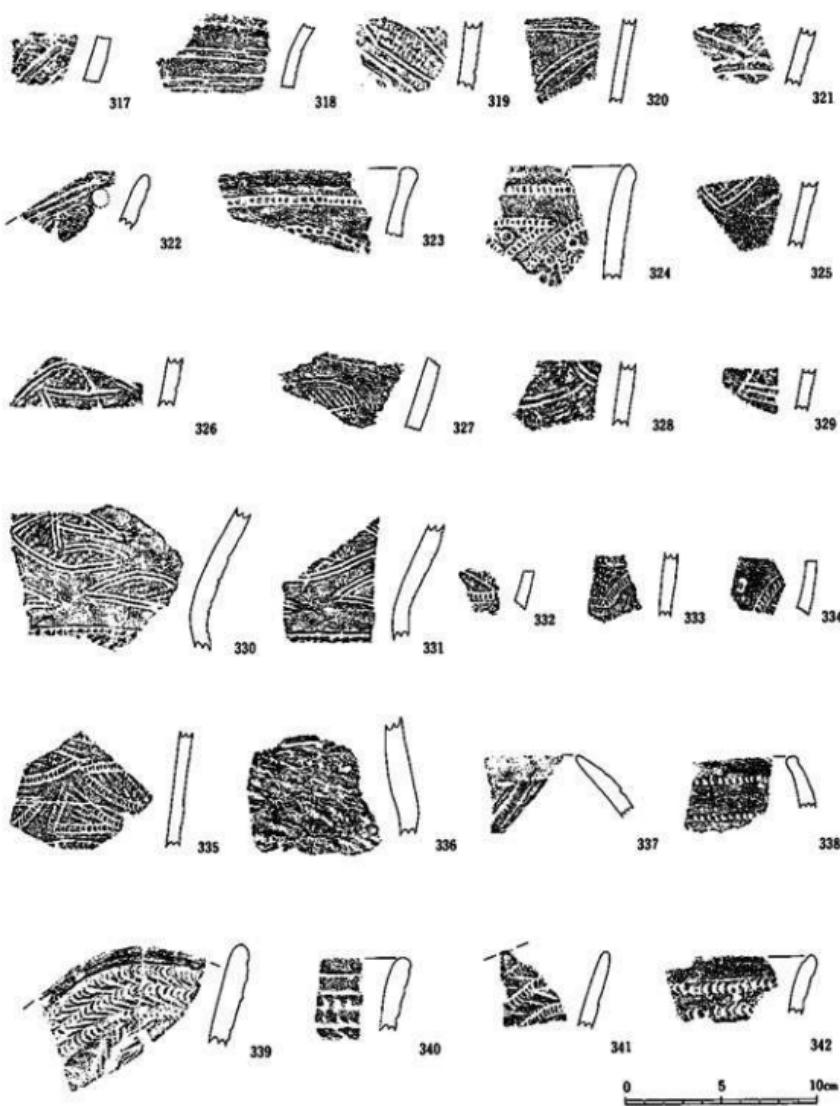
0 5 10cm

第36図 織文土器拓影 ⑩

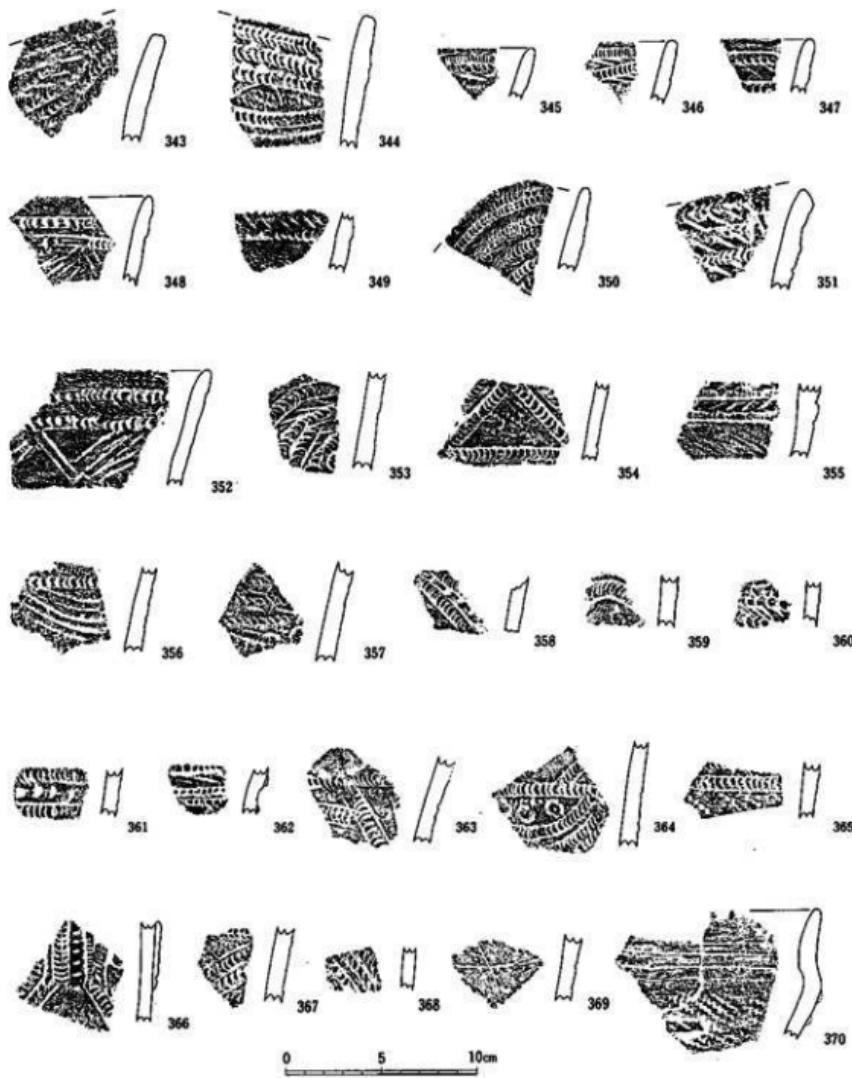


0 5 10 cm

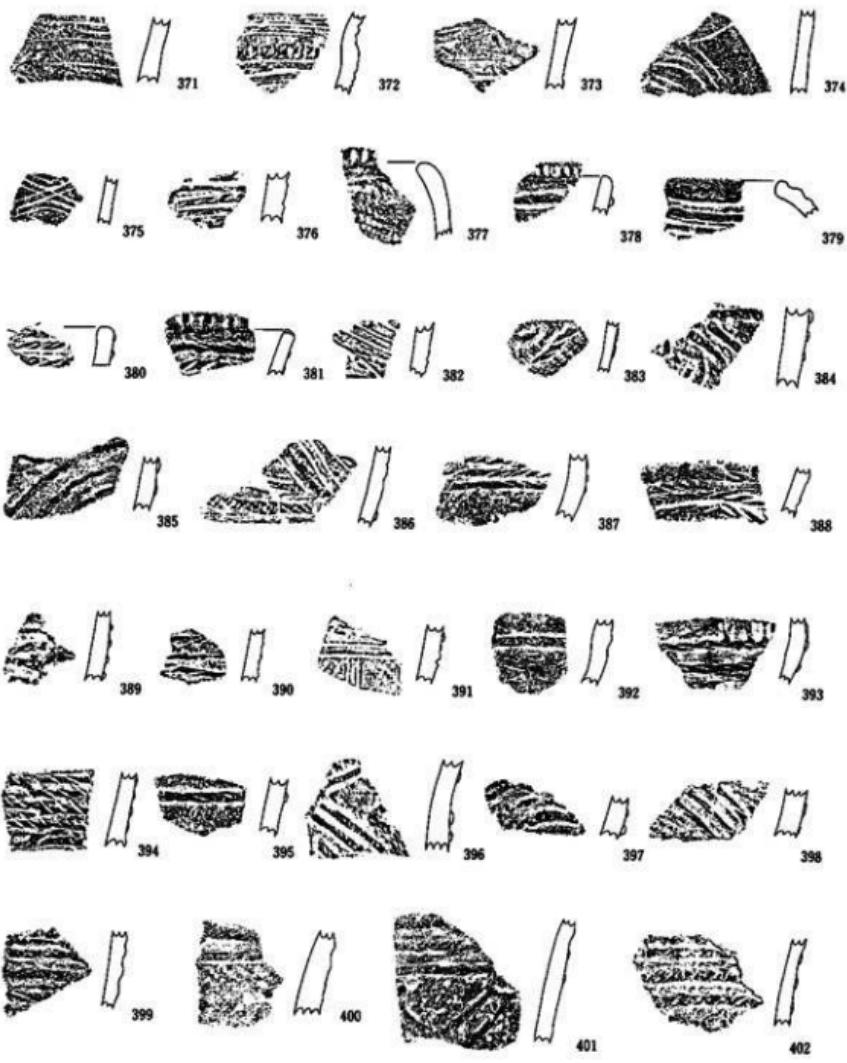
第37図 繩文土器拓影 (12)



第38図 縄文土器拓影 (13)

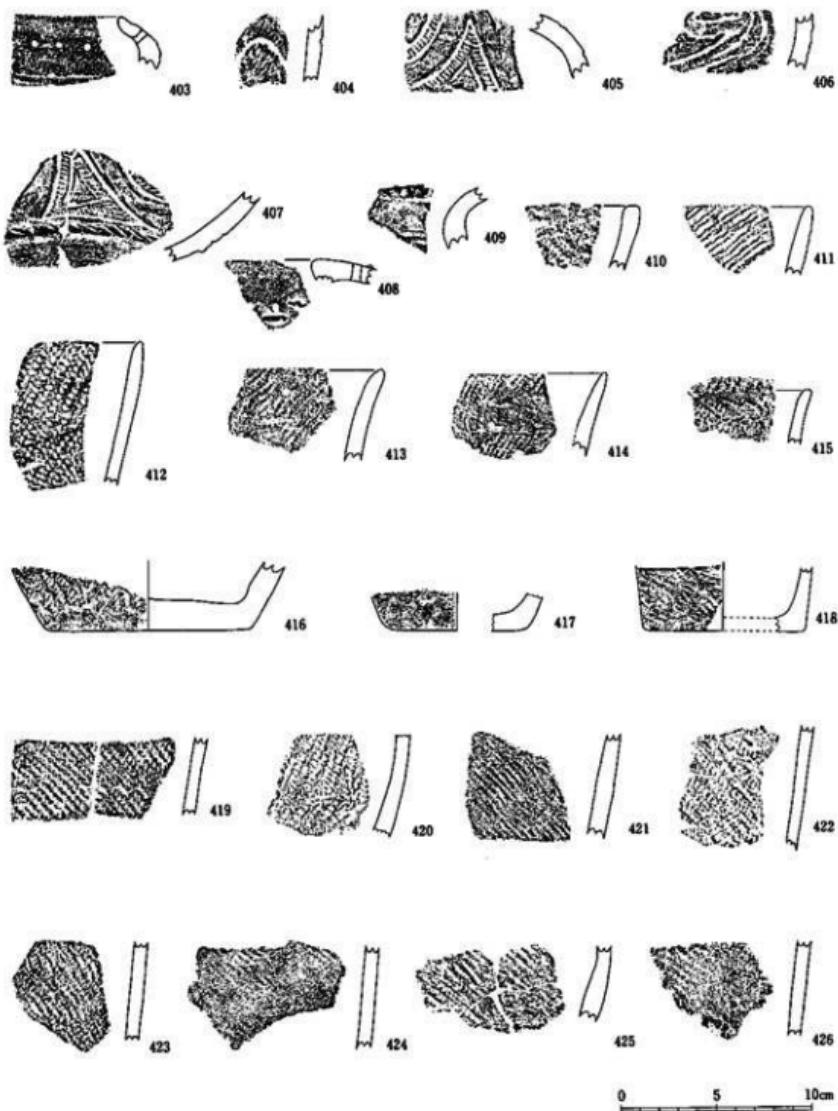


第39図 繩文土器拓影 (14)

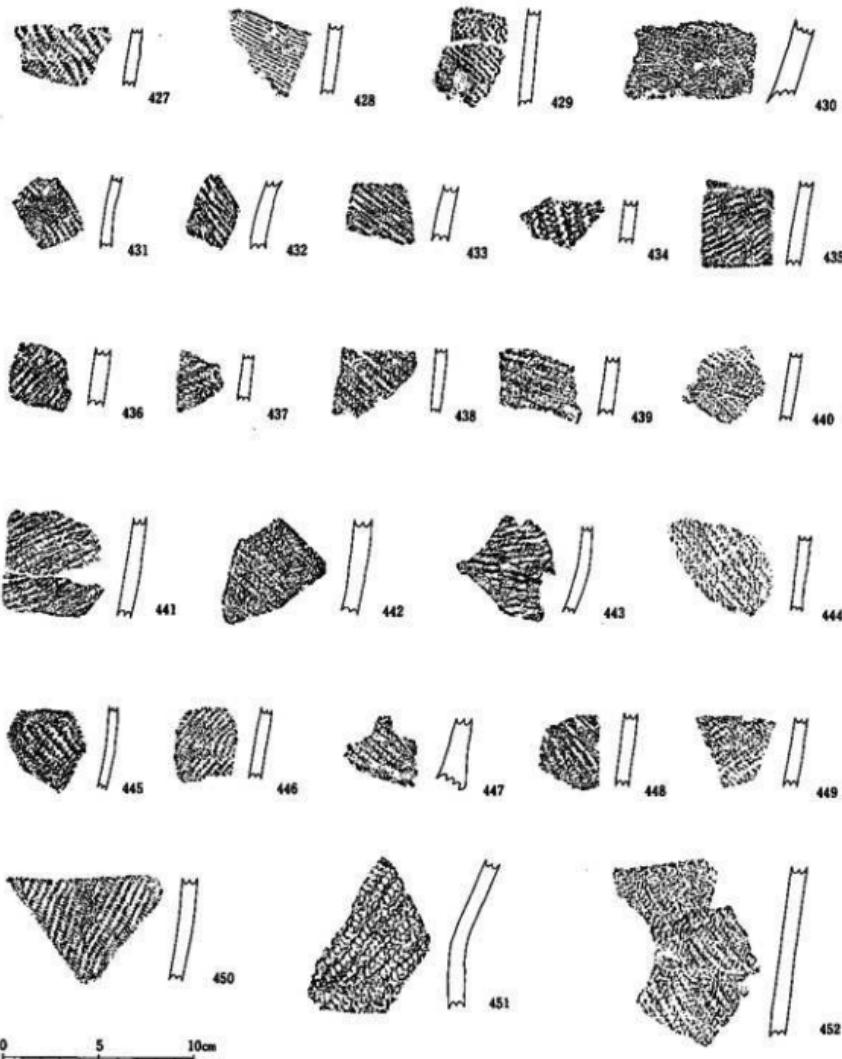


0 5 10cm

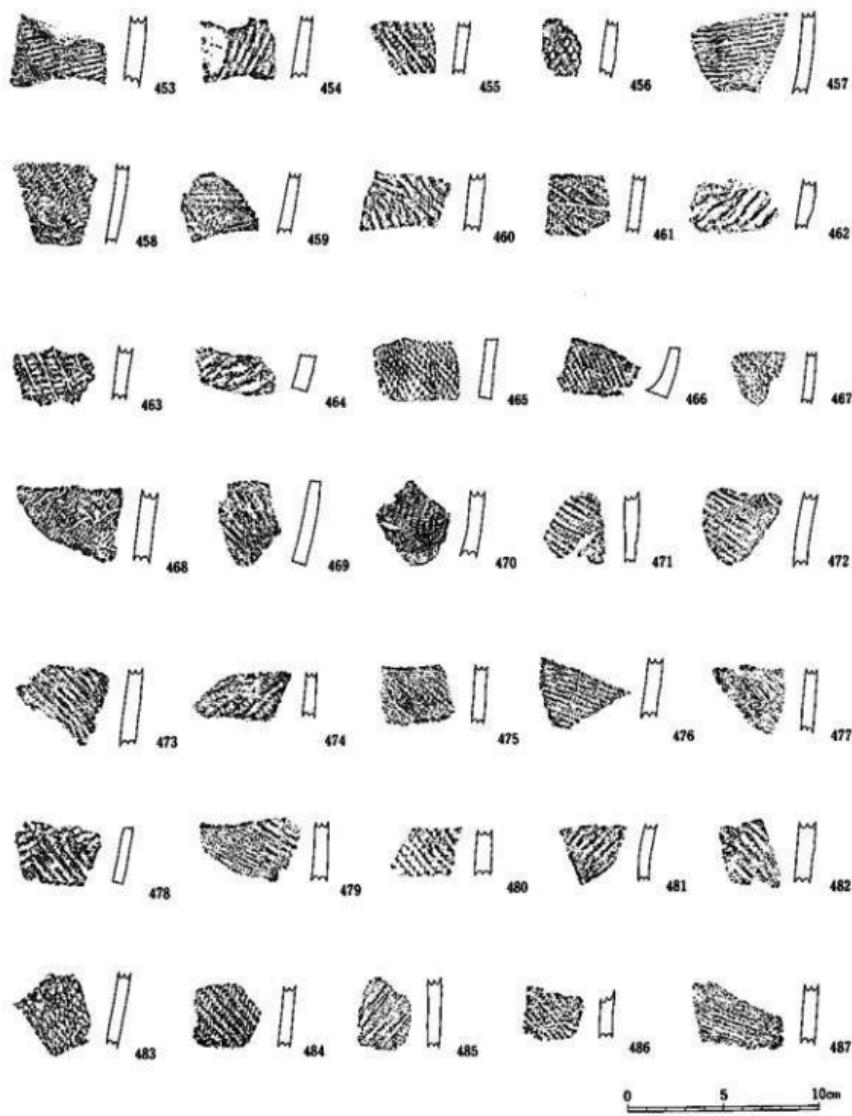
第40図 縄文土器拓影 (15)



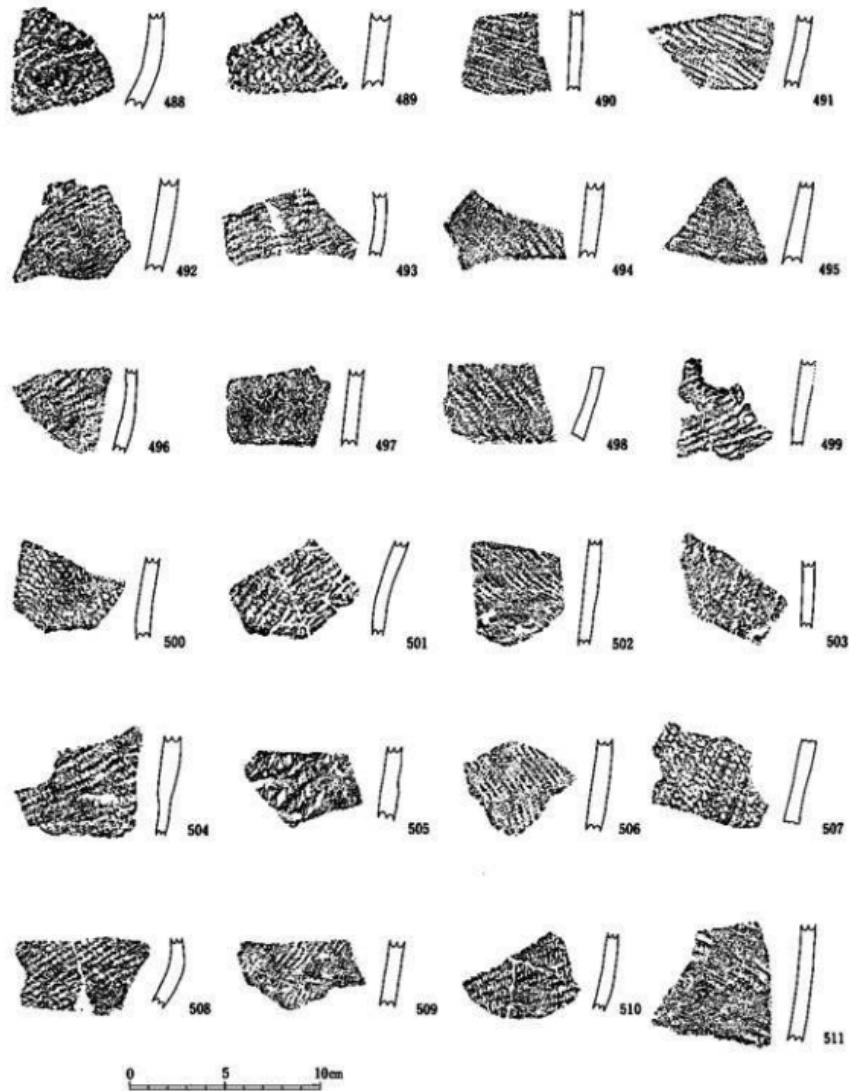
第41図 純文土器拓影 ⑯



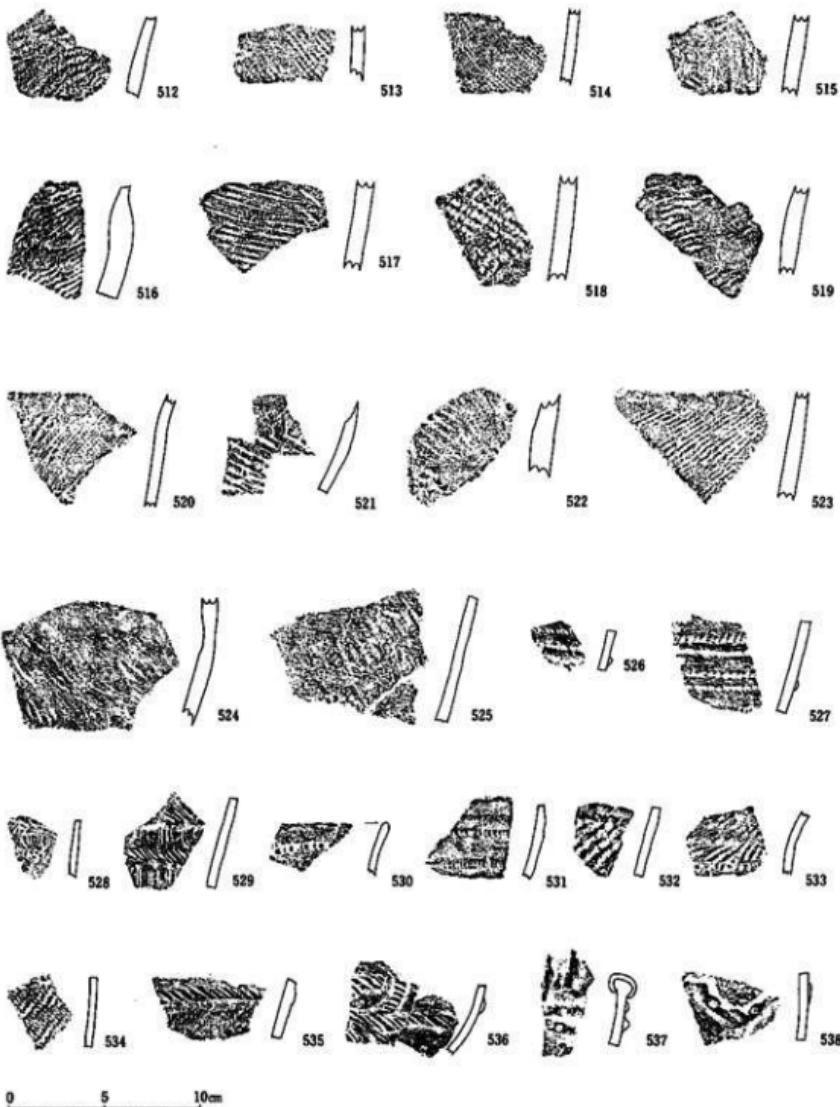
第42図 楹文土器拓影 (17)



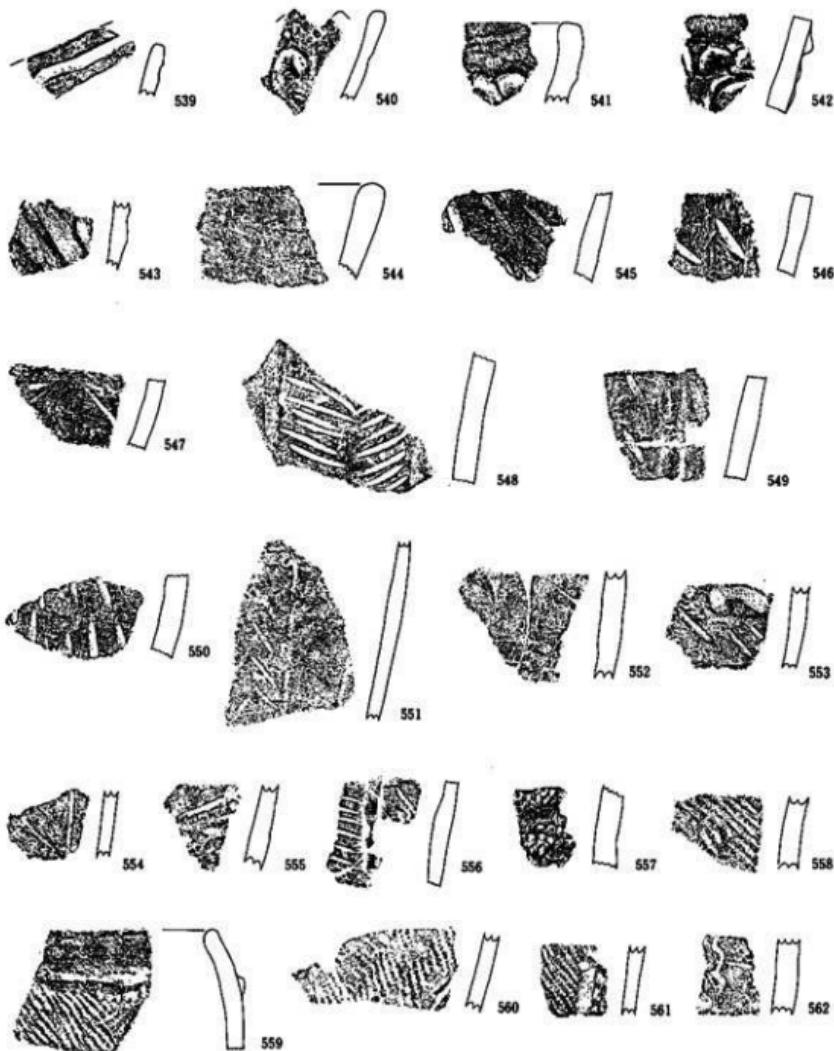
第43図 桐文土器拓影 10



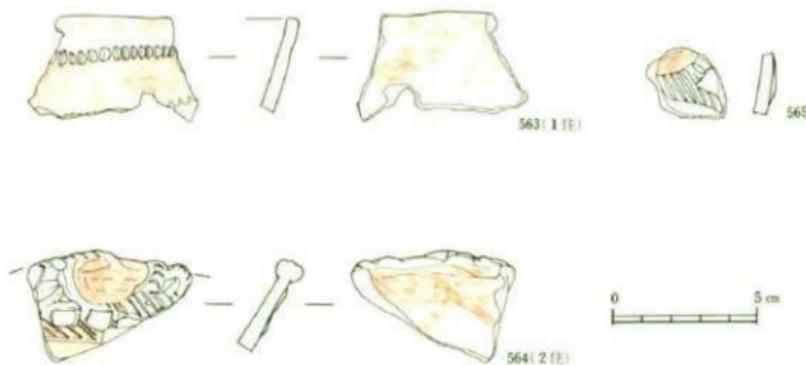
第44図 純文土器拓影 (19)



第45図 繩文土器拓影 (20)



第46図 繩文土器拓影 (2)



第47図 赤彩土器

## 2. 石器

出土した石器の総数は59点である。その半数以上が石鎌である。他に石錐、石匙、スクレーパー、エス・エスキュー、打製石斧、横刃型石器、圓石、石棒が出土した。また、平安時代のものと思われる磁石も検出された。以下に器種ごとの若干の報告を述べる。

### (1) 石鎌 (第48図)

未製品も含め34点出土した。すべて圓基、無茎に分類される。チャート製が4点、他はすべて黒曜石製である。1、2は1号住居址より出土した。1は両脚とも破損している。側縁には小さな剝離が連続しており先端部は鋭利に尖っている。2は片脚が欠損している。1、2共黒曜石製。3~12、25、26は、2号住居址より出土した。2号住居址より出土したものは6、7のように脚が多少長く、器幅の小さいもの、8、9のように、基部のえぐりが小さく、先端部の三角形の内角が正三角形の内角よりは小さいもの、4、5のように脚が長く先端部の尖っているものの三つに大きくは分けられそうである。検出面から出土している20は基部のえぐりが小さく、器形全体が正三角形型である。25はネガティヴ剝離面の側縁に調整剝離を加えている。未製品である。

### (2) 石錐 (第49図)

3点出土した。35はつまみ状の頭部をもち錐部も長い。つまみの部分には自然面が残っている。錐部は全周に調整加工され、断面は菱形を呈する。錐部先端磨耗。チャート製。36は剝片を素材としたつまみ状頭部を持つ。錐部は短く、片面のみに入念な調整加工が施されている。黒曜石製。37

は幾分横長の剝片の長軸端部に調整加工を数回加えている。頭部には素材の剝片の形状が未加工のまま残されている。チャート製。

### (3) 石匙

1点出土した。北白川下層土器に伴うとされているいわゆる三角形のものである。三角形の底辺にあたる辺がこの石匙の刃部となる。刃部の加工は背面側のみで行われている。三角形の底辺に沿って底辺と垂直に押圧剝離が施されている。チャート製である。

### (4) ピエス・エスキュー

5点出土した。いずれも黒曜石製である。40は上下に小さな階段状剝離痕が見られる。剪断面あり。41も剪断面がある。階段状剝離痕、両極剝離面あり。42, 43, 44にも階段状剝離痕が見られる。

### (5) 打製石斧

9点出土した。すべて撥形である。完形は5点である。石材はホルンフェルス、硬砂岩、安山岩、玢岩と、すべて本造跡付近で普通に見られる石である。

45は刃部に敲打痕がある。また刃部付近側縁は磨耗している。器中央付近の自然面表面は、磨擦痕がついている。基部欠損。ホルンフェルス製。46は安山岩製であるが、表面は非常に風化している。47も安山岩製で表面が風化している。基部がわずかに欠けている。48は長さ8.18cmと、9点中最小である。ホルンフェルス製であるが、これも表面がわずかに風化している。49は、両面に自然面を残している。このことは、石斧にするのに都合の良い石を製作過程で最初に選んでいたことを示している。50は長さ15.35cm重さ473gと、9点中最大である。ホルンフェルス製であるが、表面が非常に風化している。側面は下から上へ基部にかけて、敲打されている。51は硬砂岩製である。刃縁部は敲打を受け、磨耗している。側縁は、着柄の為にであろう、敲打されている。52はホルンフェルス製である。基端部に自然面が残っている。刃縁部は磨耗している。側縁は下士～基部付近まで敲打されている。53はホルンフェルス製である。刃部が欠けている。器の最も幅のある部分から基部付近まで、側縁部がつぶれている。

### (6) 四石

2点出土した。54の側縁部は敲打され磨擦を受けている。珪質岩である。

### (7) 石棒

1点出土した。細粒砂岩製である。先端部は敲打を受けている。胴部に器長軸に直交する方向で線状痕が見られる。下部欠損。

### (7) 砥石

2点出土。57には刃痕がついている。細粒砂岩製。欠損品。

註 石器実測図中 敲打痕の範囲は ト一ト 剥離痕の範囲は ト一ト でした。

石器一覧表

石錐

No	註記	基部	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	1住南西麓土	圓錐	(1.71)	(1.5)	0.26	(0.46)	黒曜石	右側欠	
2	1住南麓土	圓錐	1.7	(1.6)	0.26	(0.6)	+	左側欠	
3	2住東部麓土中層	圓錐	1.81	(1.14)	0.4	(0.64)	+	右側欠	
4	2住西側麓土上層	圓錐	(1.55)	(2.32)	0.36	(0.95)	+	左側欠・右側欠	
5	2住北部麓土上層	圓錐	2.38	(1.9)	0.26	(0.56)	+	右側欠	11と複合
6	2住西側麓土上層	圓錐	1.97	(1.45)	0.39	(0.56)	+	左側欠	
7	2住麓土南側中下層	圓錐	(1.85)	(1.29)	0.28	(0.53)	+	両側欠	
8	2住麓土南側中下層	圓錐	2.43	(2.0)	0.55	(1.85)	チャート	左側欠	
9	2住麓土西側中央	圓錐	(1.15)	1.42	0.25	(0.4)	黒曜石	上半部欠	
10	2住南部麓土上層	圓錐	(1.47)	(1.73)	0.25	(0.6)	+	下半部欠	
11	2住後出面	圓錐	(1.94)	(1.05)	(0.23)	(0.2)	+	先端～右側欠	5と複合
12	2住東部麓土中層	圓錐	(1.61)	(0.75)	(0.25)	(0.35)	+	先端～左側欠	
13	南半後出面東端	圓錐	1.70	(1.08)	0.2	(0.21)	+	左側先端欠	
14	南半後出面西端	圓錐	2.46	(1.33)	0.45	(0.89)	+	左半部欠	
15	南半後出面	圓錐	(2.15)	(0.12)	0.4	(0.75)	チャート	左側先端欠	右側を持たないが欠損した様子はない
16	南半後出面西北部	圓錐	2.34	1.53	0.31	1.1	黒曜石		
17	溝6覆土	圓錐	(2.32)	(1.49)	0.22	(0.64)	+	両側欠	
18	土被9覆土	圓錐	1.84	1.34	0.3	0.62	チャート		
19	南半後出面西側南	圓錐	2.29	1.66	0.55	1.62	黒曜石		
20	南半後出面西北	圓錐	2.58	(1.95)	0.44	(1.84)	+	右側欠	
21	南半後出面東端	圓錐	1.66	1.79	0.19	0.4	+		
22	黒色土トレナ3西半	圓錐	1.24	1.38	0.41	0.45	+		
23	黒色土トレナ中央	圓錐	1.08	1.28	0.27	0.25	チャート		
24	島石上端	圓錐	(0.93)	(1.63)	(0.24)	(0.35)	黒曜石	先端部・左側欠	
25	2往P7		1.98	1.68	0.48	1.32	+		未製品
26	2往P7		1.70	1.37	0.41	1.5	+		+
27	2住西側麓土中層	圓錐	2.34	1.72	0.51	1.5	+		+
28	2住東部麓土上層	圓錐	1.70	1.72	0.47	1.46	+		+
29	2住麓土南側中下層	圓錐	2.25	1.4	0.38	1.25	チャート		+
30	南半後出面西側北	圓錐	1.91	1.52	0.64	1.4	黒曜石		+
31	黒色土トレナ中央	圓錐	2.23	1.75	0.45	2.03	+		+
32	北半後出面南端	圓錐	2.11	1.75	0.79	2.0	+		+
33	40-78G 長棒		2.98	1.31	0.39	1.8	+	下半部欠	
34	黒色土トレナ中央	(4.23)	(2.23)	1.04	(7.95)	+			未製品

石錐

No	註記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
35	土被39	4.07	2.25	0.64	4.15	チャート		
36	南半後出面西側中央	1.55	1.35	0.27	0.45	黒曜石		
37	南半後出面東端	3.34	(2.25)	0.67	(4.69)	チャート		

石匙

No	註記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
38	2往北部麓土上層	3.57	4.46	0.55	5.98	チャート		

スクレーパー

No	註記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
39	黒色土トレナ中央	2.09	3.05	0.6	3.2	黒曜石		

ピエス・スキーユ

No	註記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
40	南半裸出面西部南	1.58	0.86	0.4	0.62	麻理石		
41	2住東部覆土中層	1.71	2.0	0.77	2.6	*		
42	2住東部覆土上層	1.78	1.58	0.7	1.95	*		
43	2住ベルト内	2.34	1.56	0.78	2.3	*		
44	1住西フク土	2.76	2.57	1.02	8.65	*		

打製石斧

No	註記	形態	刀部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
45	2住覆土北中部下層	援	直刃	(9.49)	5.25	1.80	(100)	砂岩ホルンフェルス	基部欠	自然面、刀部磨耗
46	南半裸出面西部南	援	円刃	(8.01)	5.45	1.75	(115)	安山岩	上部欠	風化
47	南半裸出面西部北	援	円刃	(13.8)	6.18	2.87	(215)	*	基部欠	自然面、風化
48	南半裸出面北東部	援	円刃	8.18	4.20	1.49	80	砂岩ホルンフェルス		磨耗
49	南半裸出面	援	直刃	12.19	5.38	1.99	265	珪岩		側面自然面
50	土壤63覆土	援	圓刃	15.35	6.61	3.79	473	砂岩ホルンフェルス		風化
51	溝1覆土	援	直刃	8.30	5.98	1.35	80	研磨岩		自然面、刀部が磨耗、側縁部つぶれ
52	溝3上中層	援	圓刃	10.08	4.73	1.23	75	砂岩ホルンフェルス		基部自然面、刃部が磨耗、側縁部つぶれ
53	溝3中層	援		(12.73)	7.82	2.98	(262)		*	刃部欠
										自然面、側縁部つぶれ

凹石

No	註記	回数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
54	2住東部覆土上層	○	10.63	6.74	4.01	420	珪質岩		側縁部敲打、磨耗
55	南半裸出面	○×2	10.21	9.01	3.25	440	砂岩		

石棒

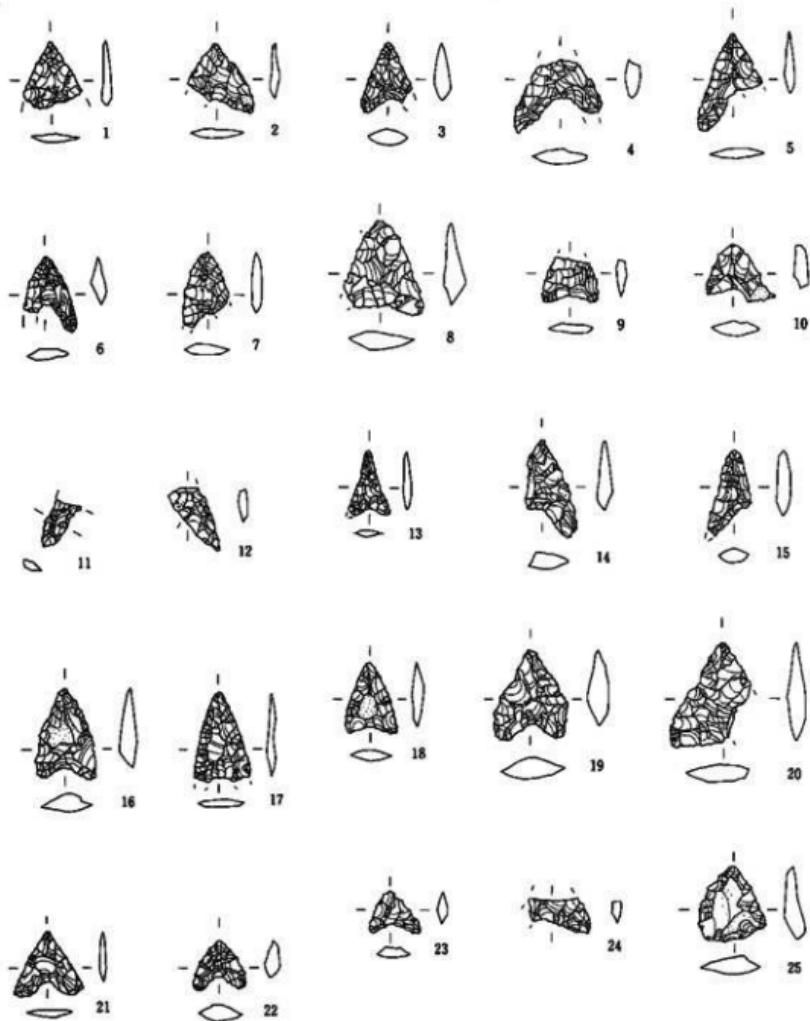
No	註記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
56	溝6覆土	7.16	2.94	2.89	(100)	細粒砂岩	下部欠	先端部敲打痕、側部端部軟弱

砾石

No	註記	使用回数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
57	北半裸出面南西部	4	8.23	3.89	3.66	122	細粒砂岩	欠	刃頭有
58	北半裸出面南西部	2	6.04	4.23	1.66	46	粘土質岩	欠	

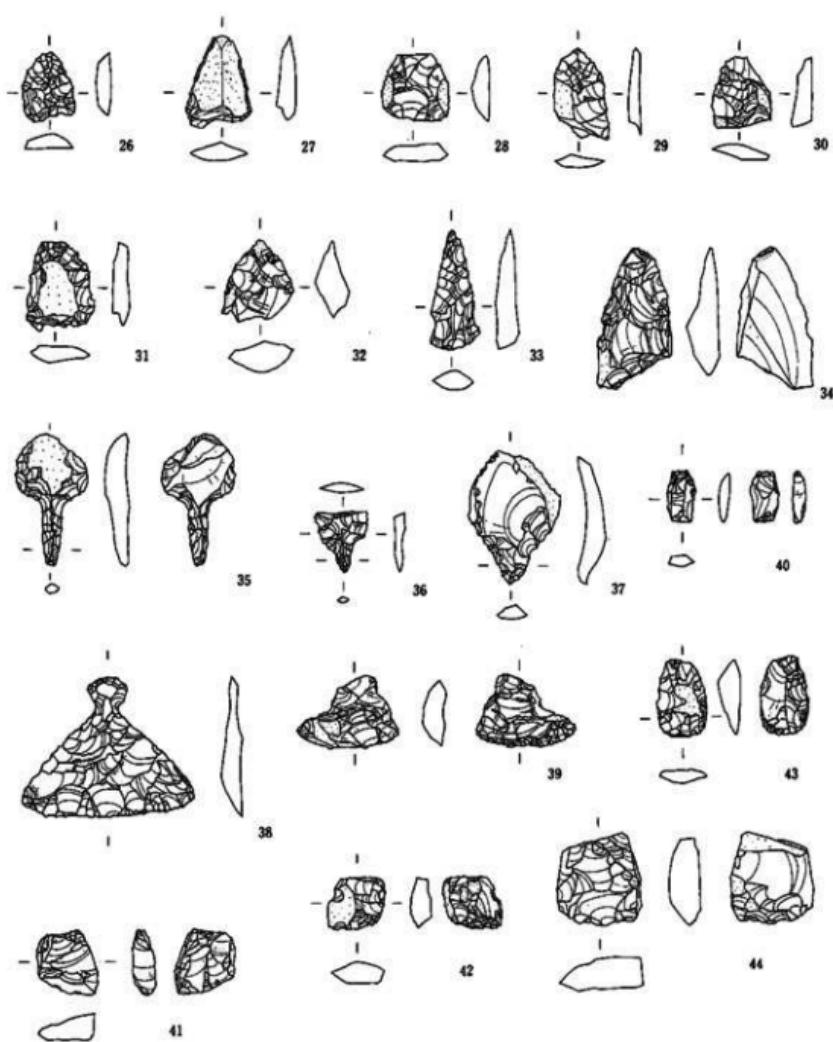
横刃型石器

No	註記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
59	南半裸出面	6.90	11.87	1.58	146	安山岩		



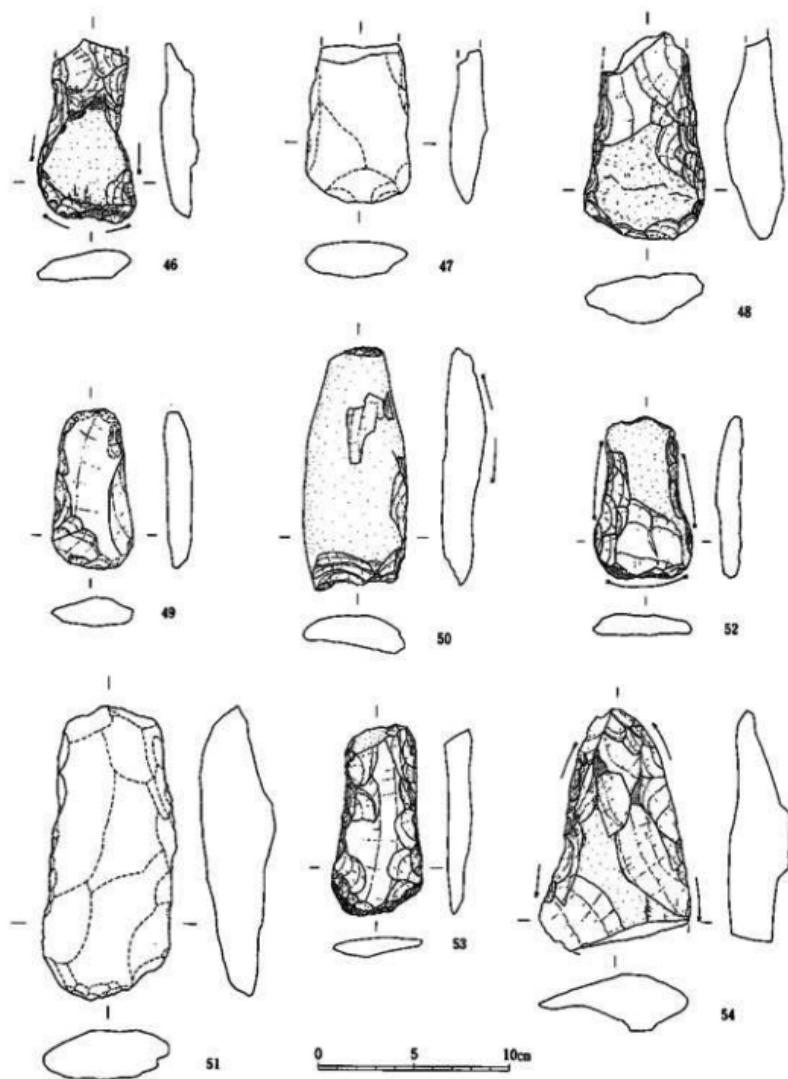
0 5 cm

第48図 石器実測図 (1)

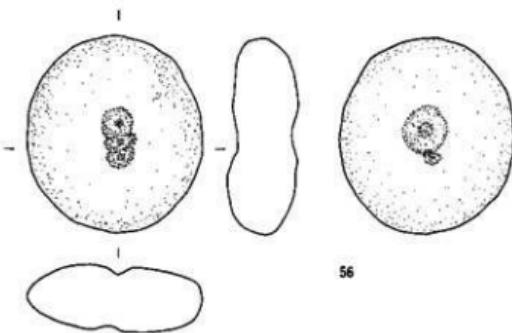
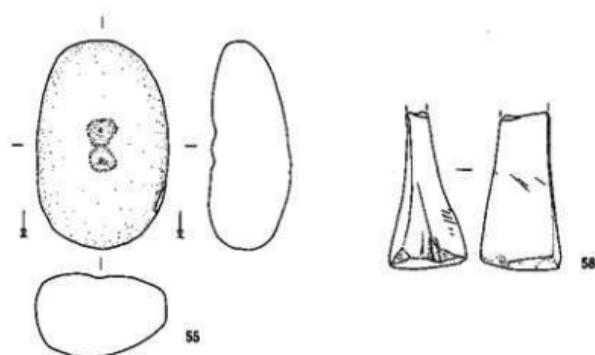
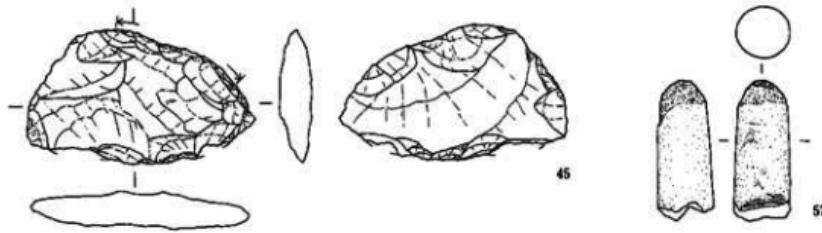


0 5 cm

第49図 石器実測図 (2)



第50図 石器実測図 (3)



0 5 10cm

第51図 石器実測図 (4)

## 第4章 砂原遺跡の調査

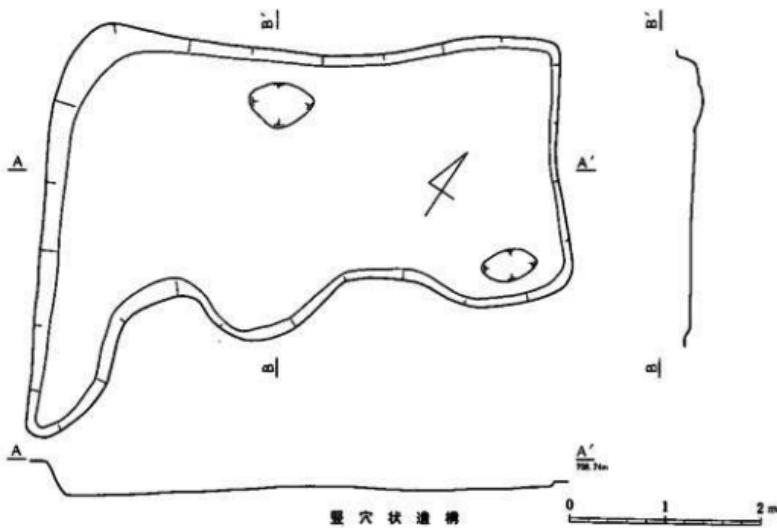
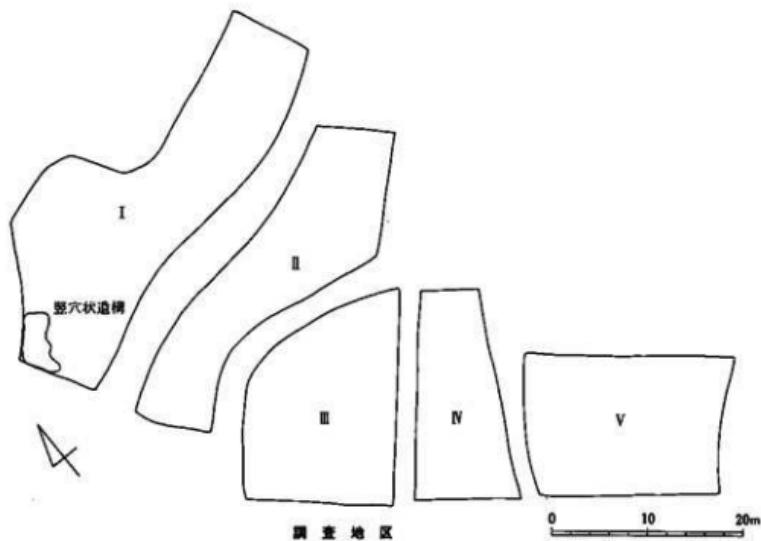
松本市大字内田1128番地一帯に調査を設定した。現地は北方50mを西流する塩沢川に臨む南から北に傾斜する水田地帯で、周囲で同時に進行している清心道路の調査地を塩沢川を挟んで北方200mのところに望む位置にある。この調査地周辺は清心遺跡に比べ傾斜が急で、水田の造成時に元の地形がかなり切り盛りされてしまっているようであった。

調査はほ場整備区域内で最も塩沢川からはなれた付近の水田5枚を選定して、西側からI～V区と命名し、重機で耕作土を除去する作業から始めた。引き続き人力で排土整理、遺構検出作業を行なったが、この段階で耕作土および水田床土下は砂礫や砂層粘質土層が地点を替えて入り混じり、塩沢川の押し出しの影響の強いところであることが判明してきた。そこで、同作業を継続する一方、部分的に深掘りをいれて下層での包含層の有無や土層の状態を確認することにした。その結果、下層は灰色や黒褐色の砂礫質の土と砂が堆積して造構等の存在が望める状態ではないと考えられたので、全面的な掘り下げは行わないことにした。最終的にI～V地区合計で約1600m<sup>2</sup>の遺構検出を行なったがI地区で1ヶ所竪穴状遺構が発見できたのみであった。このため測量は調査地区的全体を測ることを主眼にして平板測量を用いて行った。

検出された遺構はI地区の南西端の竪穴状遺構のみである。5×3mの長方形の一辺に凹凸をもつた不整な平面形をしており、南・東壁が浅く、北・西壁が深くなっている。底面は軟弱、かつ平坦ではなく、浅い窪みが2ヶ所にみられた。この遺構からの遺物は近世～近代の陶磁器片が数点出土したのみであり、この点からみるとごく新しい時期の遺構とみてよいであろう。

上記の他に出土した遺物は各地区検出面から、中～近世・近代の陶磁器片や瓦が小袋に1つ程と、古銭（寛永通宝）が1枚、黒曜石が2片である。図示できる陶磁器はなかった。

これらのことから考えあわせると、今回の調査地は塩沢川の影響が強く、遺跡の北縁部より若干はずれるものと考えられ、南方の集落の一帯が当遺跡の中心となるのであろう。



第52図 砂原遺跡

## 第5章 調査のまとめ

### 1. 清心遺跡について

最大の特徴は3つの時期が複合した遺跡だということである。第1の時期は縄文時代前期後半、第2の時期は縄文時代中期末、第3は中世であり、それらの間には時間的に大きな断絶がある。

第1の時期、縄文時代前期後半は土器編年で言えば諸磯a式・b式期にあたり、2棟の竪穴住居址と1基の集石（集石1）および調査地南半部に展開する円形を基調とする土壙から構成される。平面的な分布の状態からみて、調査地南半部の更に南方および東西へこの時期の遺構は拡がるものとみられる。竪穴住居址は2棟とも円形プランで壁は傾きが緩く、軟弱な床面にあまり深くないピットが円形に並ぶ。炉址にあたるものが検出できなかった点も同様である。土壙は断面形が円筒形に近い深いものと鍋底状の浅いものが主となり、前者は覆土中に人為的にみられる礫をもつものもあった。いずれも後述する中世の土壙と異なり、黒色土や黒褐色土等、地山の黄褐色土をあまり含まない覆土をもち、一括して埋められた状況は呈していなかった。遺物は各遺構中とこの一帯の検出面から多量の土器と、各種の石器が出土している。特にこの調査地南半部は縄文時代前期の遺構が埋没する頃、川の氾濫に類するものがあって中央に谷状の窪みができるところへ黒色土が留っており、その影響でかなり磨滅した土器片もみられた。

第2の時期は縄文時代中期末で、曾利V式期くらいに相当しようか。当初は調査地南半部の検出面（その中でも若干北寄り）から前期後半の土器に混じってこの時期のものも散見する程度に出土していたが、土壙の掘り下げを行うに従い、土壙68から一括品（20）が現れ、遺物を出土していないともその周辺には同期の土壙があると考えるに至った訳である。

第3の時期である中世については細かく年代を決定する資料の出土は、土壙からはない。ただし溝2の覆土上層にあった東海系捏鉢の大形破片が13世紀後半～14世紀前半に推定できることから、周辺の土壙の年代もこれを上下する時期であろうことが推察できる。これらの土壙は軸方向を方位とは異にし、むしろ等高線に沿い、または直交して存在しており、地点的に集中するところもみられた。断面形は壁が垂直に近い台形や長方形を呈すものがあり、覆土はa類とした一括埋没の状況のものが多い。即ち分層線が引けたものでも、それは土層堆積の時間的経過を示すものではなく掘り上げた土でそのまま埋め戻した時の順番の様な感じであって、この種の用い方をされるものとして墓址を考えている。ただ墓址にしては規模が小さいという感も拭いきれない。この種の土壙のあり方は、市内では南栗遺跡で多数発見されており、やはり中世の墓壙と推定されている。集石をもった竪穴状遺構を伴っている点も同じ（南栗では大形の土壙として扱っている）である。この他、本文では触れなかったが、この土壙の間に3ヶ所ほど小さなピットが集中する場所があった（全体

図参照)。中世の掘立柱建物跡とも考えられたので、配列を捉えようとしたが最終的には断念した。しかし、調査地北半中央部の土壙29~35の周辺のピットは明らかに長方形の範囲に集まっているし、西端部の土壙19付近のものは2つづつ組みになって一列に並んでいるように見える。調査地の北東部に絡み合って検出された溝は、特に太く古い方の溝2について先述の捏鉢ではほぼその上限の年代がおさえられ、土壙群と近接した時期に存在していたことがわかり、何らかの人為が加わっている可能性も出てきたと言える。

次に各時代の遺構の占地についてであるが、調査地はほぼ等高線に沿ってはいるが、北半部の方が比較的平坦で若干高い。またそのすぐ北には現在も小流があり、縄文期の遺構はむしろそちらの方に分布するのではないかと事前に予想された程である。しかし結果は逆で、南半の若干低い方に縄文期のものが、また小高い北半には中世のものが、しっかり区切った様に占地していた。特に縄文期には小高い所を避けなければならない理由があったのだろうか。

遺物については、縄文時代前期のこの時代の調査は、当教委としては初めてで、貴重な収穫であった。詳細は本文に譲るが、前期の黒浜式が若干、諸磯a式・b式が多量にあり、これに関西系の薄手の土器が伴うという状態で、当地方における該期資料の追加に大きく貢献するものと思われる。

## 2. 砂原遺跡について

本文のとおり遺跡の北縁をはずれて、良好な資料の発見はなかった。ただし今回の調査地に南接する現集落の中からはかつて土器等の出土があったと聞いており、遺跡自体は現集落ののる尾根状の地形の上に存在していると考えられる。

今回の調査は内田地区では久々のものであったが無事に終了することができた。両内田土地改良区、公民館をはじめとして協力して下さった地元の方々の御尽力の賜として深く感謝申し上げるとともに、今後の調査の実施においてもよろしくお願ひ申し上げる次第である。



# 図 版





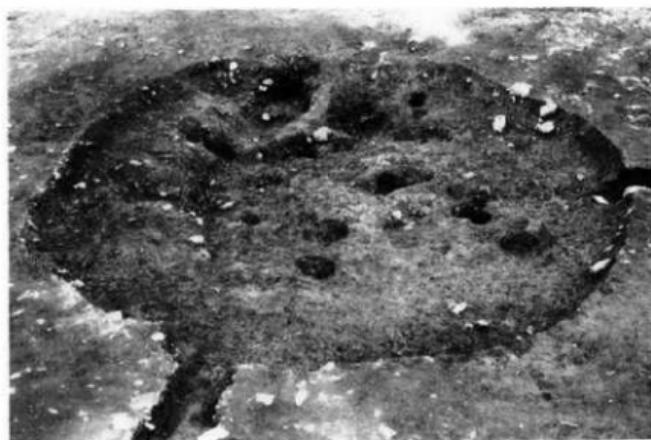
第1号住居址



第1号住居址



第2号住居址



第2号住居址



竪穴状遺構



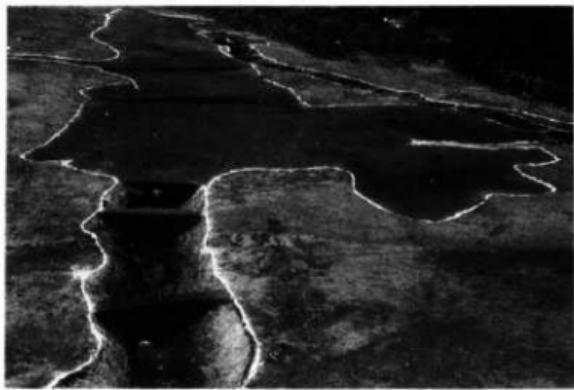
竪穴状遺構内集石



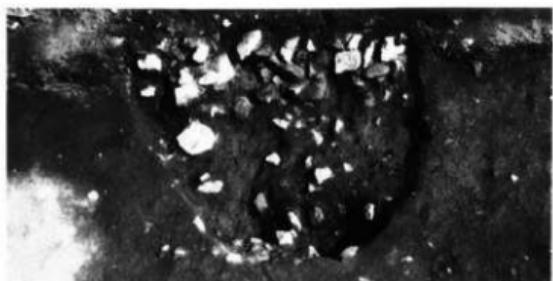
溝断面



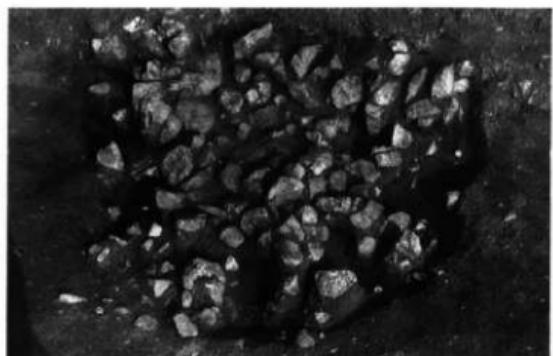
溝1~3



溝1~3  
檢出



集石 1  
掘り上げ



集石 1



集石 2



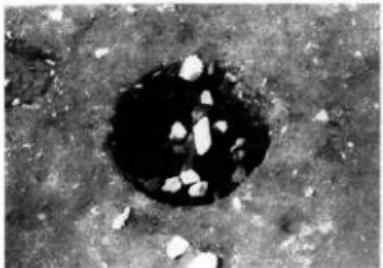
土壤 68



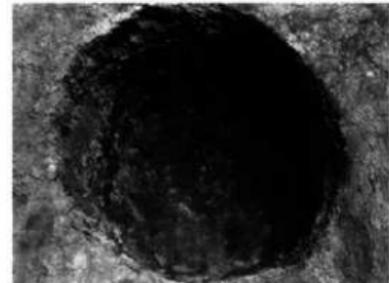
土壤 68



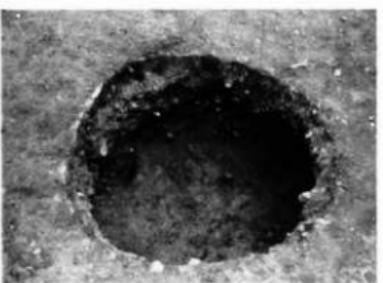
土壤 52



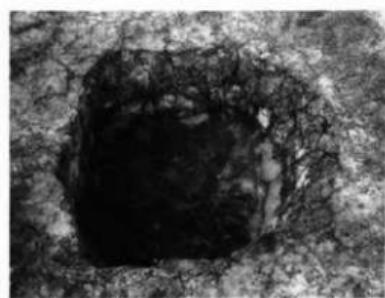
土壤 74



土壤 7



土壤 59



土壤 82



土壤83(左)・84(右)



土壤 9



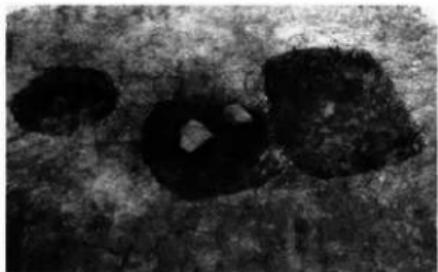
土壤 5



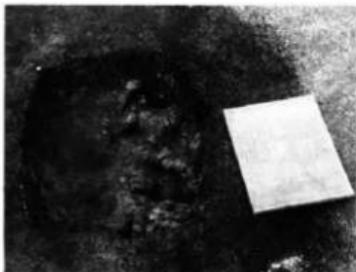
土壤 11



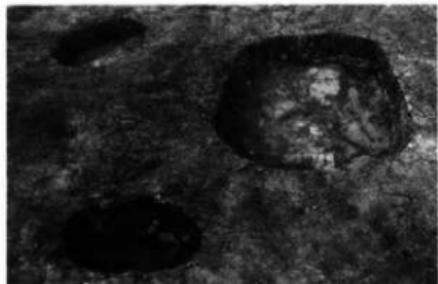
土壤 8



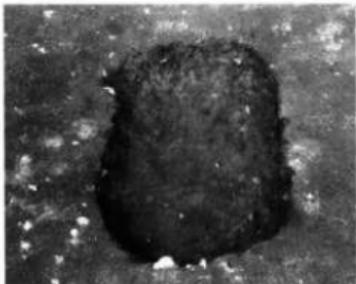
土壤 4 (左) · 3 (真中) · 2 (右)



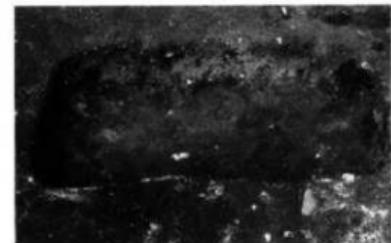
土 壤 17



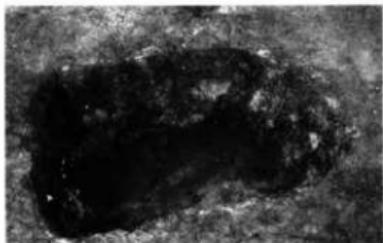
土壤 81(左上) · 80(左下) · 1(右)



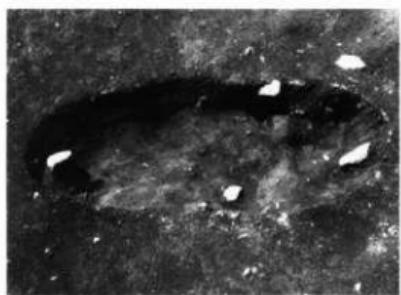
土 壤 50



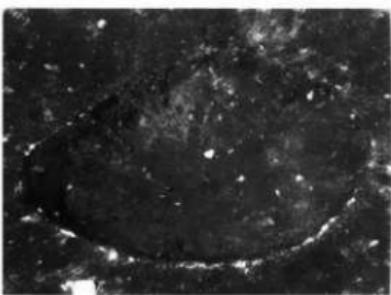
土 壤 48



土 壤 14



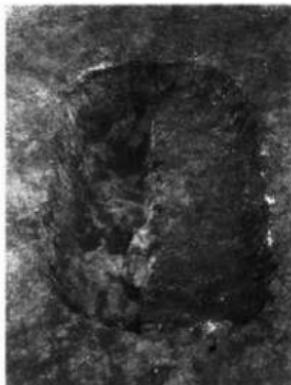
土壤 44



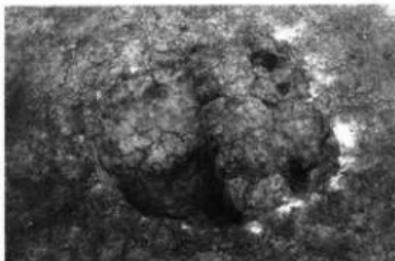
土壤 17



土壤 60



土壤 52



土壤 13



砂原遺跡 5区



砂原遺跡 3区



砂原遺跡 4区



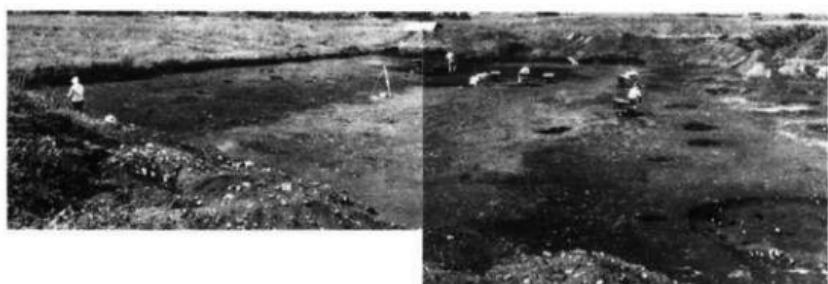
砂原遺跡 5区



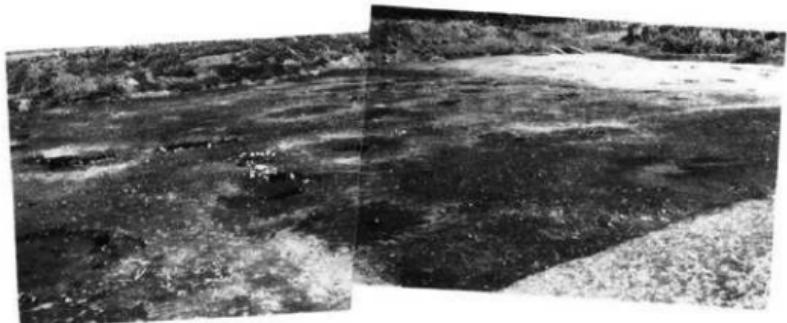
砂原遺跡 壁穴状造構



砂原遺跡 壁穴状造構



清心道路 近 景



清心道路 近 景



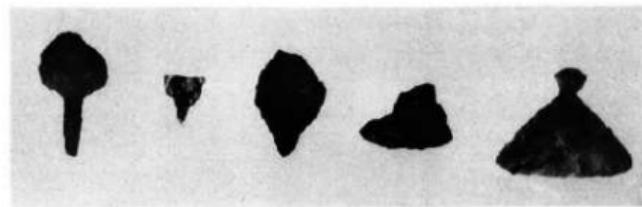
清心道路 近 景



作業スナップ



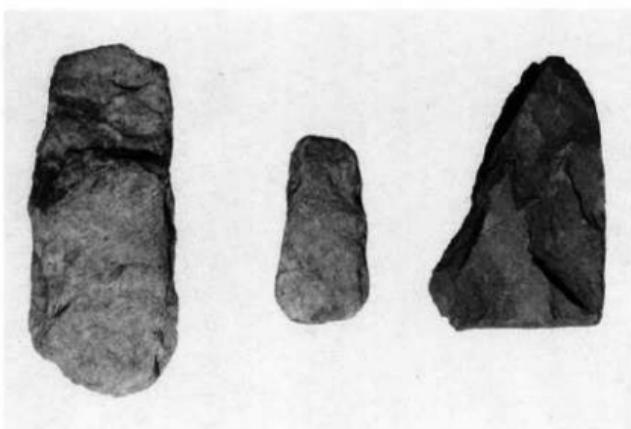
石鋸



右から  
石匙  
スクレーパー<sup>一</sup>  
石錐 (3点)



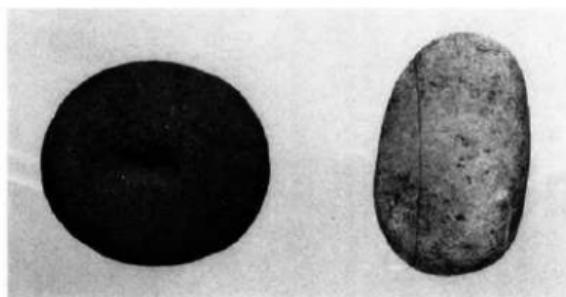
ピエス・エスキュー



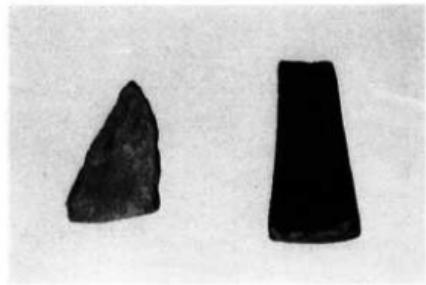
打製石斧



石 棒



圓 石



砥 石

---

松本市文化財調査報告No.54

## —松本市内田清心・砂原遺跡—

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

長野県松本地方事務所  
発行  
松本市教育委員会  
印刷 中信凸版印刷株式会社

---

